

## ごあいさつ

---

板橋区は、昭和60年1月1日に世界の恒久平和を願い、非核三原則を堅持し、核兵器の廃絶を全世界に訴える「板橋区平和都市宣言」を行いました。以来、この宣言を実りあるものとするため、現在に至るまで様々な平和都市宣言記念事業を実施し、「戦争の悲惨さ、平和の尊さ」を訴え続けています。

『次世代を担う子どもたちに平和の大切さを伝える』このような思いを込めて、この「中学生平和の旅」を行っています。今年度も被爆地である広島及び長崎に区立中学生を各22名、計44名を派遣しました。この感想文集は、平和の旅を通して学んだ貴重な経験と、現地で感じたそれぞれの「平和への想い」を自分自身の言葉で綴ったものです。

人類共通の願いである平和を、私たちは本当の意味で手にしたことはありません。世界には今でも多くの核兵器が存在し、核兵器の開発や近代化が進められています。また、民族・地域紛争などにより、子どもを含む多くの死傷者が後を絶たず、私たちの願いである世界平和の実現をより困難なものにしています。

先の大戦が終わって73年が経過し、あの悲惨な体験を知らない世代が大半を占めるなか、この感想文集を一人でも多くの方にご覧いただき、「平和の尊さ、大切さ」に対する認識を深め、あらためて「平和」について考えるきっかけとなっていただければ幸いです。

これからも、板橋区は、平和都市宣言記念事業を積極的に推進し、世界の恒久平和を実現するため、様々な機会を捉えて、「平和の心」を発信してまいります。

最後になりましたが、本事業の実施にご協力いただきました、関係者の皆様方に心より感謝申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。

平成30年11月

板橋区長

**坂本 健**



## 目次

ごあいさつ	1
第1部 中学生広島平和の旅	
1. 行程表	4
2. 団長感想文	5
3. 参加中学生感想文	6
第2部 中学生長崎平和の旅	
1. 行程表	30
2. 団長感想文	31
3. 参加中学生感想文	32
第3部 資料編	
1. 広島	
(1) 広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式次第	57
(2) 平和宣言	59
(3) 平和への誓い	61
2. 長崎	
(1) 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典次第	63
(2) 長崎平和宣言	64
(3) 平和への誓い	66

### ■広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式出席議員

石井 勉	議員	中村 とらあき	議員
大田 ひろし	議員	いわい 桐子	議員
五十嵐 やす子	議員	井上 温子	議員

### ■長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典出席議員

山田 貴之	議員	小林 公彦	議員
荒川 なお	議員	南雲 由子	議員
おなだか 勝	議員		

# 第1部

## 第24回 中学生広島平和の旅



原爆ドーム前にて

### 参加生徒

板橋第一中学校	高橋悠一朗	志村第四中学校	野稻 侑里	桜川中学校	加藤 紬希
板橋第二中学校	石浦 尚弦	志村第五中学校	仁平 万優	赤塚第一中学校	河村 晶
板橋第三中学校	山下 霸琉	西台中学校	星 百綾	赤塚第二中学校	菊池 茜音
板橋第五中学校	小西 啓子	中台中学校	矢島 基	赤塚第三中学校	小野澤花音
加賀中学校	藤本 みゆ	上板橋第一中学校	小野丹衣奈	高島第一中学校	田中 黎奈
志村第一中学校	駒井 翼	上板橋第二中学校	岩間 康太	高島第二中学校	木村 優斗
志村第二中学校	小内 関生	上板橋第三中学校	嶋 あずみ	高島第三中学校	鈴木 蒼菜
志村第三中学校	安達 来太				

### 引率者

板橋第一中学校	増田 裕子校長(団長)	深瀬 さやか教諭(指導員)	熊谷 正人教諭(指導員)
---------	-------------	---------------	--------------

## 中学生広島平和の旅 行程表

実施期間 平成30年8月5日～7日（2泊3日）

### 8月5日(日)

時 間	行 動 内 容
7:00	板橋区役所集合・出発式
7:20	板橋区役所 発
7:50	東京駅 着
8:30	東京駅 発
12:30	広島駅 着
12:40	広島駅 発(市電)
13:00	広島市役所 着
13:10	★ヒロシマ青少年平和の集い受付
13:30～17:00	★開会式(開会挨拶、参加自治体紹介) ★平和学習会(被爆体験講話、ワークショップ、発表) ★閉会式(講評)
17:30	ホテル 着
19:00	夕食
22:00	就寝

### 8月6日(月)

時 間	行 動 内 容
5:00	起床
6:00	朝食
7:00	ホテル 発(徒歩)
7:10	平和記念公園 着
8:00～9:00	平和式典参列
9:30～14:00	観光・昼食
15:00	ホテル 着
15:30～17:30	学習会
18:00	灯籠流し体験
19:00	夕食
19:50	灯籠流し見学
22:00	就寝

### 8月7日(火)

時 間	行 動 内 容
6:00	起床
7:00	朝食
8:20	ホテル発(観光バス)
8:30	平和記念公園 着(公園内見学、献花、折鶴奉納)
9:30～11:00	平和記念資料館等見学
11:30	平和記念公園 発(観光バス)
11:50	広島駅 着
12:40	広島駅 発
16:30	東京駅 着
17:30	板橋区役所着・解散式

★はヒロシマ青少年平和の集い事業(広島市主催)

# ヒロシマの実感

第24回中学生広島平和の旅  
団長 増田 裕子  
(板橋第一中学校長)

先の戦争からすでに73年が経過し、平和な社会が当たり前のような生活を送っている私達にとって、今この瞬間にも世界では、戦争に巻き込まれ、亡くなる人、大けがを負う人、食べるものもなく、生きることそのものが危い人が数多くいるということを、報道で知ることはできても、実感をもって受け止めることは難しいと感じます。

73年前、日本の広島のに、原子爆弾が投下されたことで、どれほど恐ろしいことが起こっていたかを、被爆者の体験を聴き、平和記念式典に参列し、平和記念公園内の施設を見学することで、22名の派遣生たちは実感をもって受け止め、改めて自分たちの使命を強く感じることができました。「戦争は絶対に起こしてはならない」「二度と悲しい思いをしたくない」という先人の強い願いを、決して風化させてはいけないと、生徒たちは深く心に刻むことができましたと思います。

感想文を読むと、一人一人が自分の心でつかんだことを表現していることがわかります。8月6日の平和記念式典への参列や被爆者の体験を聴いたこと、広島をはじめ他地区の同世代の人たちとの話し合い（ヒロシマ青少年平和の集い）など、感受性豊かな中学生にとって、この体験がどれほど大きなことだったか、団長として共に旅をしたからこそ、わかることもありました。このような貴重な機会を与えてくださり、すでに24回を数える派遣事業を継続してくださっている板橋区長 坂本 健様をはじめ、関係の皆様にご心より感謝申し上げます。私自身も団長として派遣していただき、報道だけではわからない、現地でしか得られないことをたくさん経験させていただきました。広島の子どもたちは、原子爆弾を投下された街の人間として平和学習を行い、平和の伝承者として育てていることをヒロシマ青少年平和の集いの運営や進行をしている姿から見て取ることができました。また記念式典では毎年、市内の小学校6年生がこども代表として「平和への誓い」を読み上げます。この「平和への誓い」のことばこそ、長年の平和学習の積み重ねの成果なのだ、式典に参列して強く実感することができました。そして86か国もの代表者が式典に参列していること、式典後も多くの外国人が、6日の夜、平和について考え、表現する場として灯籠流しの場、爆心地である元安川の周りに集っていることなど、日本だけでなく、諸外国にも同じ思いをもち、考え、行動する人たちがいるということを知り、心強く感じました。

広島から戻り、事後学習を続け、11月2日の「平和のつどい」での発表、そして各中学校での文化祭などでの発表を行います。それだけでなく、今後も大人になっても、この体験を広く周囲の人たちに伝え、まずは板橋での平和の伝承者となることを強く願います。昨年度の本校の派遣生が3年生になってからも、社会の時間に自分の体験をもとに熱く同級生に語っていたように、今後も派遣生一人一人が平和への強い思いを語り、つなぐことができれば、板橋だけでなく、唯一の被爆国である日本の、そして世界の広く平和な社会の構築に貢献することができると思います。

最後に、今年の子ども代表の「平和への誓い」の後段のことばを紹介します。

「私たちは無力ではないのです。平和への思いを折り鶴に込めて、世界の人々へ届けます。73年前の事実を、被爆者の思いを、私たちが学んで心に感じたことを、伝える伝承者になります。」



# 平和の旅で感じたこと

板橋第一中学校 2年 高橋 悠一朗

僕は広島平和の旅の中で、様々な行事に参加し、そこで知らなかったことを学び、幅広い知識を得ることができました。また、平和や戦争のことへの考え方が変わったり、たくさんの感情が沸き上がったりしました。

一日目は、青少年平和の集いで被爆者の瀬越さんからお話を聴きました。瀬越さんは11歳のとき爆心地から2km離れた自宅で被爆され、幼少期から当時のことまで話してくださいました。投下されたときは目の眩む閃光と低く大きい音で何があったかわからなかったそうです。原爆の規模は計り知れない程に大きかったのだと思いました。また、投下後は音が全くない位静かな夜が何日か続いたそうです。家屋や道、生き物などほとんどのものが焼き払われたそうで、原爆による被害の甚大さがわかりました。その後のワークショップでは、他の団体の人たちと意見交流をして、どうしたら世界が平和になるかを考えました。他の人の意見を聴くことで、平和に対する視野が広がりました。

二日目は、平和記念式典に参列しました。「平和への誓い」のこども代表の言葉の中に、こんな言葉がありました。

“平和とは、自然に笑顔になれること。

平和とは、人も自分も幸せであること。

平和とは、夢や希望をもてる未来があること。”

この言葉は、僕の心に深く残り、これが無い限り、世界は平和とはいえない、と感じました。世界にはまだ一万四千発を超える核兵器があるとされているので、それを無くすことが、平和への一歩だと思います。また、午後からの灯籠流しでは、一人ひとりの思いがつづられた灯籠が輝きながら川を下っていきました。この灯籠の願いが叶うことが平和であると思いました。

三日目は、平和記念公園に行き、献花、折鶴奉納をしました。公園の近くには原爆の子の像や被爆者慰霊碑があり、たくさんの折鶴が納められていました。被爆者の方の冥福をお祈りし、二度と同じ過ちを繰り返してはいけないという思いを強くしました。また、平和記念資料館では、原爆のことについて詳しく学び、広島でしか得ることのできない知識をたくさんもらいました。

この平和の旅を通して原爆についてより深く知り、いろいろなことを考えました。そして、平和であることは身近なようでいて、実はとても幸せなことなのだと思います。大事なことは、この過ちをもうしてはいけないということ、それを世界に広め、継承していくことだと思います。それによって、世界が一刻も早く平和になることを願っています。

# T e l l t h e p e a s e

## ～平和を伝える～

板橋第二中学校 2年 石浦 尚弦

あたりまえの朝、あたりまえの会話

そんなあたりまえの日々が一瞬にして消えてしまったあの日、

そこに広がる光景は、建物が無残にも吹き飛ばされ

多くの「あたりまえ」を奪われた広島町でした。



1945年8月6日午前8時15分、雲一つない快晴だった広島に一発の原子爆弾が投下されました。その名は「リトルボーイ」。それは、強い台風の1000倍ものエネルギーを持った爆風で鉄筋コンクリート建築以外の全ての建造物を破壊し、太陽の照射エネルギーの数千倍の威力にも相当した熱線で、屋根瓦の表面を溶かし、木造家屋を自然発火させる程までに至らせました。原爆投下直後、爆心地から半径2kmの範囲では、丈夫だった建物も窓は吹き飛ばされ、近くにいた人たちに容赦なく突き刺さりました。さらに降り注いだ放射線により、次々と多くの方が亡くなっていきました。放射線は人体に当たると、細胞の中にある染色体というものを壊死させてしまいます。細胞が破壊され、がんになってしまう人もいたそうです。この症状に関しては、放射線を受けた直後に発症するものもあれば、何年、何十年もたってから、発症するものもあります。戦争が終わった後も放射線の影響によって、生活が困難になった人たちがいることを知り、胸が締め付けられる思いになりました。広島への原子爆弾投下によって、当時の広島市の人口35万人のうち、9万～16万6千人が被爆してから2～4ヶ月以内に死亡したとされ、その中には、日本人の他に、中国人やアメリカ人、東南アジア人なども含まれていました。そして、世界にはまだ原爆を保有している国がたくさんあります。唯一の被爆国民として我々は何ができるのでしょうか？

平和へと繋がる第一歩として、僕は「伝える」ということが大切だと思います。年々、被爆者の方々の数も少なくなってきてしまい、被爆者の戦争に対する思いを聴くことも難しくなってきています。そんな今だからこそ、次代を担う僕たちが核兵器の恐ろしさ、戦争の悲惨さについて、自らの目を見て、心で感じて、深く学び、考えることが必要です。そして、被爆者のみなさんの強い意志を次の世代に語り継いでいくことが、自分たちができる、平和への第一歩だと思います。

# 私たちにできること

板橋第三中学校 2年 山下 覇琉



家族がいて、おいしいご飯が食べられて、友達と笑いあって。そんな何気ない日常がずっと続く。これがどれだけ幸せなことか、考えたことはありますか。今から73年前の1945年8月6日午前8時15分。原子爆弾「リトルボーイ」によって、広島の人々の日常は一瞬で奪われました。

## 一日目 平和学習会（被爆体験講話等）

瀬越さんは11歳の時、爆心地から2km離れた自宅で被爆されました。爆風で家が崩れ、空からは黒い雨が降ったそうです。逃げてきた人の大半がひどいやけどを負い、水を求めていました。瀬越さんは平和な未来を創るために“I think. I say. I do.”（考え、発言し、行動する）が大切だとおっしゃいました。

## 二日目 平和記念式典

式典には約5万人もの人が参列し、私たちのような中学生団体や、平和団体、被爆された方、海外の国の方々がいました。そして、8時15分。1分間の黙とう。この時間の中に何万もの罪のない命が奪われてしまったという事実を突きつけられ、私は胸を締め付けられたような感覚になりました。

## 三日目 平和記念資料館

資料館には原爆について、被爆前後の街の様子、被害の概要などが展示されていました。中でも記憶に残っているのが、やけどを負った人々の写真です。全身に深くやけどを負い、痛みや体の熱さに苦しんでいます。この写真は、原爆がどれほど悲惨であり、酷いものであるのかを教えてくださいました。



## 最後に

核兵器は無差別に大量の命を奪います。しかし、被爆者の平均年齢が80歳を超え、体験を語れる人が減ってきています。そんな中、私たちにできることは今回の3日間を見て、聴いて、学んだことを後世に伝え続けることだと思います。

平和の旅は平和について改めて考えさせてくれる貴重な体験であり、とても有意義な3日間でした。



# 広島に行って感じたこと

板橋第五中学校 2年 小西 啓子

三日目、私たちは原爆資料館を見学しました。私は、原爆資料館の被爆者の方の写真を直視できませんでした。たくさんの資料や写真を見ているうちに気分が悪くなり、逃げるように写真に背を向け、ベンチにへたりこみました。その日はとても暑かったのに、しばらく悪寒がしていました。戦争の悲惨さを実感した瞬間でした。

一日目に伺った、瀬越睦彦さんの被爆体験談が蘇ってきました。両手を突き出し、爪のところに引っかかった皮膚が垂れ下がり、水を求め、助けを求め、死んでいった人々…。核兵器の使用が、いかに人の道から外れているか、そして人にそんなことをさせてしまう戦争というものに憤りを覚えました。

二日目の夕方、平和を願って灯籠を流しました。たいへん美しかったのですが、何故か、切ないような、悲しい気持ちになりました。平和の灯が、平和を願う人がこんなにたくさんいるのに、何故今も世界に戦争や核が存在するのでしょうか。

広島平和記念式典で、私の印象に残ったのは、広島県知事の湯崎英彦さんのお話でした。核による抑止力がいかに馬鹿げているか、例え話を用いて訴えていました。

ヒロシマ青少年平和の集いでは、「平和をどのように伝えるか」という課題でディスカッションを行いました。色々な意見が出ましたが、その中の一つに「平和の連鎖」というものがありました。これは、まず身近な人に平和について理解してもらい、その人がまた別の身近な人に…というように、人の繋がりを使って世界を平和にするというものです。これなら、誰にでも、今すぐにでもできます。私にも。

「戦争の恐ろしさ」「核の非人道」「平和のありがたさ」を、少しでも感じていただければと思います、この文章を書いています。そして、平和のために考えたことを、身近な人に伝えていただければ嬉しいです。私も伝えていきます。世界から核兵器と戦争がなくなり、かわりに平和と笑顔があふれることを、強く願います。

最後に、この旅を支えてくださった方々に、心から感謝いたします。ありがとうございました。



原爆ドーム



灯籠流し

# I think. I say. I do.

加賀中学校 2年 藤本 みゆ

73年前の1945年8月6日午前8時15分。広島を、たった一発の原子爆弾が襲った。

今回の平和の旅では、原爆ドームや平和記念式典、平和記念資料館など様々な所を回り、「あの日」について詳しく知ることができた。今までの私は「平和とは何か」と聞かれると、はっきりとした答えを言うことが出来なかった。でも今なら、その答えをしっかりと自分の言葉で伝えることができる。

今回の平和の旅で特に印象に残ったのは、瀬越睦彦さんによる被爆体験講話だ。瀬越さんは当時11歳で爆心地から2km離れた自宅で食卓につこうとした時被爆した。空襲警報のサイレンが鳴る度「戦争だ…」と子ども心に思ったそうだ。終戦と知った時は、素直に嬉しかったと言っていた。しかし5年前、90歳のおばあさんの被爆体験講話を聞きに行った時に、今までずっと戦争について黙っていた自分が卑怯だと思ったそうだ。それからたくさん勉強して、今のように被爆体験講話をするようになったという。瀬越さん曰く「私は、原爆を投下したアメリカを憎いとは思わない。戦争そのものに怒りと憎しみを抱いている。平和な世の中にするために必要なのは、“I think. I say. I do.” 考え、発言し、実行することだ。」

私たちは今「考える」という所で止まってしまっているのではないか。「戦争はしてはいけない」と考えるだけでなく、それをみんなに訴え、自分のすべきことを実行することが大切だ。

戦争は英語で“WAR”と言う。これは“**We Are Right**”「**私たちは正しい**」という文の頭文字をとって作られたものだ。つまり、戦争とは人間の自己中心的な考えにより生まれるものなのだ。この世界は何十億人も人間で成り立っている。各々の心が平和であれば、そもそも争いは起こらないだろう。では、その平和な心とは何か。私は相手を尊重する気持ちだと思う。誰かが行動を起こす時、それには必ず理由がある。その理由を主観的に捉えるのではなく、相手を尊重する気持ちを大切に耳を傾けてあげる。そして、それを踏まえての解決策を世界規模で考えていくことが平和への近道だと思う。

**「戦争はしてはいけない。平和な世の中をみんなで目指していこう」**

核兵器の恐ろしさ、戦争の無意味さ、平和の尊さを訴えていくことが後世を受け継いでいく私たちの使命ではないだろうか。

# 広島で学んだこと

志村第一中学校 2年 駒井 巽

## 「原爆」の恐ろしさ

1945年8月6日午前8時15分、高度9000M上空で一機のB29爆撃機(エノラゲイ号)により相生橋を目標にして放たれた原子爆弾「リトルボーイ」は、風に煽られ島病院の上空600Mで核分裂爆発を起こし、膨大なエネルギーの「熱線」、「爆風」、「放射能」が放たれ、一瞬にして多くの人々の命を奪いました。その瞬間は生き残った人も、身体中にやけどを負い皮膚は垂れ下がりました。これが、今からたった73年前に起こったとは思えません。

## 「被爆者」の方のお話を聴いて

「ヒロシマ青少年平和の集い」で、僕は人生で初めて「被爆者」の方のお話を聴くことができました。その方は、当時11歳という若さで被爆をしました。その日の朝は、家の前で隣の家の子供と「今日は、何をしようかなあ？」と話をしていたほど日常的でした。そしてお母さんに「ご飯だよ」と言われ家に入り、お母さんからご飯を受け取ろうとした瞬間「被爆」しました。一瞬お母さんがまるで「蠟人形」のように真っ白になったと思った次の瞬間、「ドン！」という轟音と共に家が崩れたそうです。そして、親戚の家に行く途中、市街地の方で「被爆」をした人々が、見るに忍びない姿で、「水をください」と言いドブ川に入り、そのまま息絶えた人も多くいたそうです。その後降った「黒い雨」により多くの人が後遺症に苦しみました。今回のお話は、今まで本で読んだものなどよりも言葉に重みがありました。

## 「原爆ドーム」を見て

僕は、初めて広島に行き、そして初めて「原爆ドーム」を見ました。写真では、何度も見たことがありました。しかし、写真で見るとより実際に生で見た方が、何倍も生々しくて「原爆」の恐ろしさを目で見ることができました。

## 「平和記念式典」に参列して

「平和記念式典」では、安倍晋三内閣総理大臣をはじめとした方々の、「平和への誓い」などのお話を聴くことができました。そして、どの方も言っていたのは、「核廃絶」についてでした。僕は、改めて「核廃絶」というのは、世界共通の目標であるということに気づかされました。

## 感想

僕は、広島に行き、そして原爆についてたくさんの事を知ることができました。また、会ったことのない他校の生徒たちと2泊3日一緒に過ごしたことにより、団体生活で足りないことなども学ぶことができました。

# 今ある平和に感謝する

志村第二中学校 2年 小内 開生

今回、広島平和の旅に参加させていただき、現地広島でしかわからないことがたくさんありました。原子爆弾の脅威、放射線による被害や後遺症、家族との別れのつらさ等、ここで見たことや聴いたことを私は少しでも多くの人に伝えていきたいと思いました。そして、私達戦争を知らない世代でも、戦争の悲惨さ、平和の尊さについて、もっと真剣に考えていかなければいけません。

被爆者の方による体験講話では、爆撃直後から終戦までの生活等について聴くことができました。今まで戦争のことを詳しく知らなかった私にとって、この体験講話は衝撃的でした。この方は、終戦を迎えてからも戦争での出来事について話すのが辛く、この方の両親も多くは語らなかったそうです。

しかし、このままでは「戦争」が風化されてしまい、いつか日本人の記憶から忘れ去られてしまうという思いから、今では多くの人に話をされています。苦しかった過去を思い出し、口に出して話すことはとても辛いと思います。話してくださった被爆者の方の思いを受け止め、私も微力ながら「伝承者」となり、後世へ戦争・原子爆弾について語り継いでいきたいと思います。そして、二度と同じ過ちを繰り返さないよう、平和への思いを新たにした経験でした。

平和記念資料館の訪問では、原子爆弾製造の過程や威力等についての情報が数多くあり、私の想像を絶するものでした。被爆者が着用していた服や8時15分を指したまま止まっている時計等が史料としてあり、原子爆弾の威力や恐ろしさを学ぶことができました。これらの史料から、当時の何気ない日常が一瞬にして奪われてしまったということを実感することができました。この資料館を訪れた人達が、少しでも戦争や原子爆弾、平和について考える機会をもって欲しいと思いました。

被爆者や戦争を経験した人達がいなくなってしまう時は確実に訪れます。その方たちの代わりに戦争を知らない私達が、後世に被爆者の思いと、この日本で起きた事実を伝えていき、風化させないようにしていく必要があります。広島のことをもっと多くの人に知れ渡り、世界中の人々が平和について一緒に考え、戦争とはどんなに悲惨な出来事かもっと知ってもらいたいと思います。広島平和の旅の経験は、とても貴重なものとなりました。これを機会に、戦争や平和についての考えを深め、この先少しでも核廃絶に貢献できればいいと思います。

# 広島平和の旅に参加して

志村第三中学校 2年 安達 来太

原爆被害にあった方の講話を自分の耳で聴きたく、今回平和の旅に参加しました。

一日目に、ヒロシマ青少年平和の集いに参加しました。

平和の集いでは主に、平和とは何かということについて5～6人の討議で話し合いそれを発表したりしました。

また、原爆体験者の瀬越さんの講話を聴いて原爆の恐ろしさを改めて感じました。中でも「原爆を落としたアメリカに、恨みはありますか?」といった質問に瀬越さんは「日本人も韓国人や朝鮮人を何人も殺したし、原爆がいけないのではなく、戦争そのものがいけない。」と仰っていたことが心に残り平和な世界に一步でも近づくためには戦争がなくなることが大切だと感じました。

二日目、平和記念式典に参加、その夜には灯籠流しに参加しました。

式典では、広島市長をはじめとした大勢の方々が平和を祈り黙祷を行っていました。たくさんの方々が平和を祈っている事を実感しました。

次に灯籠流しを行いました。大勢の方々が参加していて平和に対する思いを感じました。また、自分が思っていた平和は争いがないことだと思っていたのですが、相手のことを思うことが平和につながるとこの時思いました。

三日目、平和記念公園に行きました。

そこには原爆の子の像がありました。その像のモデルになったのは佐々木禎子さんなのですが禎子さんは、当時2歳で被爆しました。その時には何も起きなかったのですが小学6年生の時に突然白血病にかかり翌年2月に入院しました。その時、折り鶴のことを知り亡くなる寸前まで諦めずに折りつづけましたが、願いは叶わないままこの世を去りました。私はこの話を聞いて原爆の悲惨さと、当時の状況を知りました。

最後に

私は禎子さんの話、瀬越さんの講話、平和記念式典、灯籠流しなどを体験して最初は平和のことや原爆のことを理解していたつもりでしたが、どれも間違っていることに気づきました。平和とは、相手のことを思う気持ち。相手の立場になることができる世界だと私は思います。



# 私にできること

志村第四中学校 2年 野稻 侑里

「これが、戦争だと思った」

被爆者の瀬越さんの言葉が、私の心に重く波紋のように広がった。瀬越さんの話を聴いている内に、全身に鳥肌が立った。

8月6日の朝、瀬越さんはいつものように母親と朝ごはんを食べようとしていた。「ごはん」といってもひどいときは大豆のかすに麦を混ぜたととても質素なものだった。そのとき、ピカッ！という強い光が飛び込んできた。瀬越さんはこの時の体験を、「前にいる母の姿が真っ白な蠟人形のように見えた」と語った。その後すぐに、ガラガラガラッと音がして気が付くと家がめちゃくちゃになっていた。寝ていた弟をかばった母親の背中も、血でぐちゃぐちゃになった。いくつもの瓦が落ちてきたのだ。家を出ると、「熱いよう」「痛いよう」そういう声があふれ、広島が黒と赤の世界になっていた。

私は言葉が出なかった。いつもの生活が、たった一つの原因で変わってしまったのだ。広島で原爆によって亡くなった人はその年の暮れまでに推計14万人にも達する。のちに発覚した人も合わせると23万人。また家屋の90%以上が焼失した。その中で瀬越さんや、あのとき広島に住んでいた人々は何を感じどう思ったのだろうか。考えると胸が苦しくなった。

瀬越さんは思い出すのも辛いあの日のことを話し、平和の大切さを改めて伝えてくれた。しかし、これから生きていく私たちは戦争や原爆を知らない。そんな私たちが平和な世界を作っていくために何が一番必要だろう。そう瀬越さんに問うと、“I think. I say. I do.”という答えが返ってきた。自分で考え、自分で発信し、自分で行動するという意味だ。自分にできることに精一杯取り組む姿勢が大切なのだ。

そのことを実行している団体は世界にはある。若者中心の「ICAN」は核兵器廃絶のために署名活動などを行い、昨年ノーベル平和賞を受賞した。私もこのように平和のために行動できることはあるのだろうか。私たちは「平和の集い」という場で他の自治体から来た人や広島の学生たちと意見を交換しあった。被爆者の方の話を家族や周りの人、そしてこれから生まれてくる人たちに伝えること。SNSやYouTubeなどで海外の人たちにも原爆被害の実情を発信すること。それらを一人一人が意識すること。



ICAN 活動の様子▲

世界にはまだまだ紛争が絶えない。核を保有している国も多い。しかし、その事実を目を瞑り、見えないふりをして安閑と日々を過ごしているだけではいけない。私はこれからも、平和の旅で学んだことを通して自分にできることを考えて実行していきたい。

# ヒロシマをつなぐ

志村第五中学校 2年 仁平 万優

皆さんは「原爆」についてどれくらい知っていますか。私は被爆者の方のお話を聞いたり、平和記念式典に参列したりと、「原爆」について考える機会をいただきました。そして、「原爆」がどれほど悲惨なものだったのかを学びました。

## <ヒロシマ青少年平和の集い>

私たちはいろいろな団体の人達と集まって、平和について学びました。そこで学んだ原爆のことはとても衝撃的なことでした。原爆によって一瞬で命を落とした人もいました。また、爆風によって吹き飛ばされたものにささってしまい、建物につぶされ逃げ場を失ったまま、炎に包まれて亡くなった方もいました。私は、原爆がもたらした被害の大きさに驚きました。私はこの集いで学んだ数々のことの中で、心に残った言葉があります。「人類は『核兵器』と共存出来ない」という言葉です。この言葉には世界中の人々が目指さなければいけないことが示されていると思います。私たちはこの言葉を忘れず、核兵器をなくすことを実現すべきだと思います。被爆者である瀬越さんからのお話の中で「考えて、言って、行動する」という言葉があり、とても印象に残っています。この言葉にはこれからはなければいけないことが表れていると思います。それは普段の生活から始められることだと思います。

## <平和記念式典>

式典に参列した国の数は昨年を上回っていました。平和や原爆に対する意識が高まっていることの証だと思います。私はこども代表の方が言った「私たちは無力ではないのです。」という言葉に心を打たれました。これから私たちに来ることは何なのか、私たちには何が出来るのか、ということを考えさせられる言葉でした。式典は私にとって平和について考える最大の場所になりました。

## <未来へつなぐ>

この三日間は私にとって平和について深く考えるととても貴重な機会になりました。多くの人の命を奪うために使われた恐ろしい「原爆」ですが、私には原爆を「恐ろしい」という言葉だけで言い表すことが出来ません。原爆は想像してもしきれない程悲惨なものだったのです。

時間が経つにつれて、少しずつ核兵器廃絶に向けて歩んでいることは事実です。しかし、それと同時に戦争、原爆への意識が希薄になっていることも本当だと思います。だからこそ、「考えて、言って、行動する」ことが必要だと感じました。

今回、「平和」について深く考える貴重な機会をくださった先生方、私たちに向け、お話をしてくださった方々、広島の皆さん、本当にありがとうございました。

# 戦争が落とさせた原爆

西台中学校 2年 星 百綾

1945年8月6日月曜日午前8時15分。広島は晴天の空に放たれたのは“原子爆弾”でした。一発の原子爆弾により、一瞬にして街は消え、多くの命が失われました。

今回、広島平和の旅に参加して、私は、原子爆弾、戦争、平和について学び、被爆された方の戦争や平和についての思いにも触れる事ができました。

私が一番衝撃を受けたのは、平和記念資料館です。資料館では、原爆投下直後の生々しい資料が展示されていて、どれも目をそむけてしまいたいものばかりでした。「ワンピース」「焼け焦げた三輪車」「形見の弁当箱」や「人影の石」等とても悲惨な遺品の展示がある中、一番印象的だったのが、「8時15分で止まった時計」でした。時計の表面の硝子は、砕けていて、針は8時15分を指したまま止まっていました。一瞬にして広島の街は消えたのだと言われている様でとても恐怖を覚えました。他にも被爆の惨状を示す資料からは、一瞬の被害だけでなく、後遺症についても学ぶことができました。一瞬の被害の他にも一生、人々の心と体の両方を苦しめ続ける原子爆弾は人類には絶対に必要のない兵器だという事を改めて感じました。

被爆体験証言では、講師として瀬越睦彦さんからお話を伺いました。瀬越さんは、小学5年生で11歳の時に爆心地から2km離れた自宅で被爆しました。瀬越さんは、つらい記憶をできる限りそのまま話してくれました。そして話の中で何度も“I think. I say. I do.”といい、私たちに二度とこんな世界にしない為には、考え、話し、行動することが大切だと仰っていました。瀬越さんの話は、とても怖く、悲惨なものでしたが、戦争についての理解が深まりとても良い経験になりました。

私がこの3日間で学んだ事は、どれも言葉にできない程恐ろしく、受け止めたくない現実でした。私は今まで怖そうという理由だけで戦争、原爆の話から逃げていました。今回の旅は、怖く辛い事が多かったけれどとても良い経験になりました。そして今は、何も学ばない、ただ戦争は怖いからダメと言っているだけでは、戦争がまたどこかで起こり、原爆も投下されてしまうかもしれないと思っています。そうさせない為にもまず一人一人が戦争、原爆について正面から学び考えていく必要があると思います。私は、そのきっかけをつくる為、後世に伝える為に、この旅で学んだ事を活かして活動していきたいと思いません。そして、人にはそれぞれの考え方がある様に感じ方も違います。だからこそ、現地に行って、自分なりに感じて、考えてほしいと強く思いました。



# 平和と使命

中台中学校 2年 矢島 基

1945年8月6日、午前8時15分。

広島に原爆が投下され生命の全てが一瞬にして奪われました。

## 【ヒロシマ青少年平和の集い】

1日目には、全国16団体の中高生が集い平和について考えました。ここでは被爆体験者の話を聞いたり、『平和をどのように伝えるか』というテーマのもと、「自分にとっての平和とは？」をグループに分かれて、ディスカッションをしました。

そこでは、普段あまり耳にしたり考えたりすることのない意見が、私と同じ年代の中学生から発言されたことに驚きと感動があり、自分ももっと深く考え、学んでいかななくてはならないと強く思いました。そのためには、戦争体験者の話を積極的に聞いたり、日本だけでなく、世界の戦争遺跡も見学に行かなくてはならないと考えました。

## 【平和記念式典】

2日目に行われた式典には原爆で犠牲になった人を慰霊するために5万人が集いました。式典の中で小学6年生のこども代表が「平和への誓い」を発表しました。

平和とは 自然に笑顔になれること

平和とは 人も自分も幸せであること

平和とは 夢や希望をもてる未来があること

この部分がとても印象に残りました。



## 【平和記念資料館】

3日目に訪問した資料館は、原爆投下直後の資料が展示されていて、目を覆いたくなるようなものもありました。その中でも、着物の柄が背中に焼き付いている人の写真が特に印象に残っています。また、黒焦げになったお弁当箱や爆風でボロボロになった服など、実際に見なければ想像もつかなかったものが多くあり、原爆の恐ろしさを実感しました。



## 【最後に】

この3日間を通し、「平和とは何か」を私なりに考えてみました。その結果、世界中に友達をつくることだと考えます。なぜなら、友達がいる国を攻撃しようとは、絶対に思わないからです。そして、自分が戦争や紛争のない平和な国で生活できていることは、当たり前ではなく、感謝しなければいけないことだと強く感じています。

また、現在世界には1万4千発以上の核兵器があるとされていることに、全世界の人々が注目してほしいです。そして、私は、核を持たない勇気を世界中の人々に伝えていきたいと思えます。

この経験と学びを通し、私は、私自身の使命を自覚することができました。



# ヒロシマの今

上板橋第一中学校 2年 小野 丹衣奈

戦争についてあまり知らないという人がいるのならばそのまま無関心でいることはあってはならない事だと思います。何故ならば 1945 年 8 月 6 日 8 時 15 分に投下された原爆は人々を恐怖のどん底に陥れたからです。

## 【平和記念資料館】

私は、展示されている全てのものから戦争の悲惨さを感じました。中でも特に印象に残ったのは一人の男の子が門にすがって泣いている絵です。この絵の話には続きがあって、この男の子に声を掛けて触ってみると直ぐに彼は死んだそうです。この子は亡くなる前どんなに不安で悲しい気持ちだったのでしょうか。私には想像もつきません。そして、きっと沢山の子供達が彼と同じ被害に遭い同じ思いをして亡くなった事でしょう。そう思うと胸が締め付けられました。そして、実際に起こった辛く惨い現実を目を逸らさず向き合い後世に伝えていかなければならないと強く実感しました。また、平和記念資料館に行ってもう一つ気が付いた事があります。それは、そこに来ている約半数が外国人だという事です。家族連れで来ている方も多く見かけました。これ程世界中の人々が関心を持ち見学に来ているのに当事者の日本はどうでしょう？日本は世界で唯一の被爆国です。だったら、この悲惨さを伝えられるのは私達になるのではないのでしょうか。私は今回平和記念資料館を見学し終えて改めて、世界唯一の被爆国の伝承者としての責任を持ちたいと思いました。

## 【被爆者体験談を聞いて】

話をしてくださった瀬越さんは、長い間体験談を話したくなかったそうです。しかし 5 年前 90 歳位のおばあさんが杖をつき一生懸命に話している姿を見て、「私は今までずっと被爆体験から逃げてきた卑怯者かも知れない…」と思い被爆体験を話し伝える事を始めたそうです。また、「原子爆弾を投下したアメリカへ憎しみなどはありますか？」との質問に「憎んではない。戦争そのものが悪で戦争をしたのが日本でもあるから。」と応えていました。これを聞いて、とても辛い被爆を受けその後も被爆と戦争のトラウマを抱えて何十年も過ごさなければならなかったのに、自分達日本も悪かったと認めた上で自身の被爆体験を私達の為に精一杯伝えて下さった瀬越さんの思いを知る事ができました。

## 【平和記念式典】

平和の誓いの言葉で印象的だったのが「平和をつくることは難しいことではありません。私達は無力ではないのです。」でした。この言葉で原爆、戦争について学び伝える事は平和をつくる力があるのだと気が付かされました。

多くの貴重な体験をさせていただいた関係者の皆さん、ありがとうございました。



# 世界が平和になる日が訪れるように

上板橋第二中学校 2年 岩間 康太

1945年8月6日午前8時15分、広島は一発の原子爆弾によって廃墟と化しました。その時、原爆が投下されたその下で何が起こっていたのでしょうか。また、その後にはどのような苦悩の日々が待ち受けており、それをどう乗り越えてきたのでしょうか。

## 「ヒロシマ青少年平和の集い」での被爆者体験証言

ここでは爆心地から2km離れた自宅で被爆した方の体験について聞くことが出来ました。この方の家族は、幸いにも人体への原爆による被害をほとんど受けることはありませんでしたが、「水、水」と言いながら、熱線によって皮膚が垂れ下がった状態で、川に飛び込む人々もいたと言います。その人々はやがて死んでしまい、川は死体で埋め尽くされました。

最後に、各地から集まった団体と共に「平和とはどういうことか」について、いくつかのグループに分かれ考えを深めました。

## 平和記念式典へ参列して

式典では、内閣総理大臣をはじめ多くの方々が出席し、広島市長が平和宣言をしていました。最後には、2人の小学生が平和の誓いについて述べました。また、8時15分には、1分間の黙とうを行い代表の方々が献花をしていました。

## 灯籠流しを実際に行って

「灯籠流し」とは、実際に原子爆弾が投下される標的となった相生橋のある元安川に灯籠を流す行事の事です。灯籠には、それぞれ平和への思いを書き、流しました。夜になり、灯籠によって少し明るくなった風景はとても幻想的で、印象に残るものとなりました。

## 原爆資料館を見学して感じたこと

原爆資料館では、原爆によって潰れたビンや亡くなった方々がその時着ていた服、被爆前と後の原爆ドームの模型が置かれていて、原爆による被害のすさまじさを改めて認識しました。また、今の生活のありがたみを感じました。

## 最後に・・・まとめ、感想

今回の「広島平和の旅」では、国民が戦争に対して複雑な心情を抱いていたこと、直結しなくても小さな行動が平和につながることを改めて感じました。しかし、実際に日本では戦争が起こり、核兵器が使われました。この過ちを二度と繰り返さないために、そしていつか世界が平和になる日が訪れるように、僕たちがこれから戦争、平和について語り継いでいく必要があると思います。

最後にこのような経験をさせてくださった多くの方々、ありがとうございました。

# ヒロシマ～現地の人々の思いを感じて～

上板橋第三中学校 2年 嶋 あずみ

## 『被爆体験講話会』

平和の旅一日目。「ヒロシマ青少年平和の集い」では、広島市の、原爆を学び平和の大切さを発信している「中・高校生ピースクラブ」のみなさんが原爆の恐ろしさを伝えてくれました。一生懸命に教えてくれた姿から、「平和」に対する強い思いを感じずにはいられませんでした。

被爆体験講話会。被爆者、瀬越睦彦さんは、「戦争」について重々しい表情で語ってくださいました。瀬越さんは東京から広島へ疎開し、1945年8月6日、当時11歳のころに爆心地から2km離れた自宅で被爆。疎開前の東京では空襲を体験。瀬越さんは空襲による音を「ドカンッ」という大きな声で表現していました。私はこの時とても驚いたと同時に、空襲の怖さを耳で感じました。疎開先の広島ではいじめにあい毎日殴られていたそうです。原爆投下後の状況は想像するだけでも残酷で、胸が痛みました。やけどで肉がはげ、手をぶら下げて歩いている人、黒い固まりの死体、水を求める人々。たった一つの原爆が一瞬にして多くの人々の「自由」と「命」を奪いました。瀬越さんは、核のない世界にするために「行動を起こせる人間」になることが大切、と話してくださいました。”I think. I say. I do.”瀬越さんのこの言葉が、とても心に残りました。「戦争」・「平和」を伝える使命が私達にあることを改めて感じました。

## 『平和記念式典・灯籠流し』

平和の旅二日目。多くの人々が平和記念式典に参列しました。参列者の中には海外の方もいて、ヒロシマの「平和」に対する意識が世界中に広がっていることを感じました。

灯籠流しでは、一人一人の言葉が刻まれた灯籠が夜の元安川を流れました。原爆ドームと灯籠。明るく照らされ、人々の平和を願う思いが表れていました。

## 『平和記念資料館』

平和の旅三日目。8時15分で止まった時計や被爆者の服などの展示物は、ヒロシマに投下された「原爆」の恐ろしさを物語っていました。戦争で亡くなった方々はもっと生きたかったでしょう。資料館にある展示物の中には、亡くなった方の様々な気持ちもふくまれているはずです。「平和になってくれ」「戦争を起こしてはいけない」このような気持ちだったのだらうと私は想像しました。亡くなられた方々のためにも、「戦争」の悲惨さを、私達が語り継がなければいけません。

現地の人々は、私達に分かりやすく「戦争」について教えてくださいました。広島から日本へ、日本から世界へと広がる「平和」への思い。私達がすべきことは、ヒロシマで学んだ「原爆」の恐ろしさを未来に向けて「伝える」こと。だから私はこの経験を生かして、まずは家族に「戦争」の悲惨さや「平和」のありがたさを伝える。そして自ら考え、伝え、行動できる人になろうと思います。

# 平和を伝える

桜川中学校 2年 加藤 紬希

1945年8月6日。午前8時15分。

明るく色づいていた街は、一瞬にして黒と灰色だけの世界になった。

平和の旅に参加して一番強く印象に残ったことは、一日目に聴いた被爆者の瀬越睦彦さんのお話です。11歳で被爆した瀬越さんは、その時に見た広島の人々の姿が忘れられないそうです。瀬越さんの「二度と戦争をしてはいけない。核兵器と人間は共存できない。」という力強いメッセージが心に響きました。

二日目に参加した平和記念式典では、広島市長の「平和宣言」、こども代表の「平和への誓い」を聴きました。老若男女問わず、特に広島の人にとって8月6日は特別な日であり「この日のことを忘れてはいけない。自分たちが伝えていくのだ。」という強い気持ちで臨んでいることがわかりました。

三日目に訪れた平和記念資料館では、原爆の残酷さ・悲惨さをよく知ることができました。特に私が衝撃を受けたのは、原子爆弾の熱線によって大やけどを負い、着物の柄が体に焼き付いてしまった女性の写真です。私達が想像もつかないような熱さだったのだらうと思いました。他にも爆風で吹き飛んだ木材がお腹に刺さってしまった人の絵や、放射能の影響で白血病になってしまった人が治療を受けている写真がありました。瀬越さんから聴いた「今も白血病で苦しんでいる人が大勢いる。」という話を思い出し、とても悲しくなりました。原爆を許してはいけないという思いが強くなりました。

## 《まとめ》

今回の旅で、原爆を五感で感じることができました。衝撃を受けたことも多かったです。戦争は、人と人が傷つけあう意味のないことです。原爆は街も、人も、そして一番大切な心を無くしてしまいます。原爆のむごさを未来に伝えることで、これからも生きていく子供たちに平和のバトンを渡せるのだと思います。平和な世の中にするためには、相手の考えを理解しようと話し、分かり合えるはずだ、と話し合うことを諦めないでいることだと思います。広島の人たちの「伝えていくのだ」という強い気持ちに触れることで、原爆を風化させないことが一番大切であり、伝え続けて行くことしか平和への近道はないのだと思いました。



# 広島平和の旅に参加して

赤塚第一中学校 2年 河村 晶

## <ヒロシマ青少年平和の集いに参加して>

ヒロシマ青少年平和の集いでは、同じぐらいの学年の人たちと平和とは何か、核兵器をなくすにはどのような活動をすれば良いか話し合いました。また、原爆を体験した瀬越さんからお話しを聞きました。「朝食を食べようとした時ピカッと目の前が真っ白になった。」  
「母の背中は幼い弟をかばって、ぐちゃぐちゃになっていた。」 「焼けただれた腕を前にだして痛いよお、痛いよおと歩いている人がいた。」瀬越さんは昨日のここのように思い出せると、たくさんのお話しをしてくださいました。瀬越の講話を聴いて、核兵器を一刻も早く世界からなくしたいと思いました。



## <平和記念式典に参列して>

式典には安倍総理大臣、広島市長、たくさんの方や、約5万人の一般の方が参列されました。私はこの式典の子供代表の「平和とは、自然に笑顔になれること。平和とは、人も自分も幸せであること。平和とは、夢や希望をもてる未来があること。」という言葉が心に残りました。

## <平和記念資料館を見学して>

平和記念資料館には原爆についての資料がたくさんありました。原爆が投下されたあとの変形した瓦や、ガラス瓶が展示されていて、原爆の恐ろしさを感じました。被爆された方の衣服やそのとき所持していた物を見て衝撃を受けました。服はボロボロ、所々に血がついていて着ていた人にどんな被害がもたらされたかはっきりわかりました。溶けて原型をとどめていないお金や、黒焦げになったしゃもじ、タイヤが曲がった三輪車など、様々なものが目に飛び込んできました。特に忘れられないのがボロボロになった制服です。原型はとどめていますが、袖のところや裾のところ、帽子が特にボロボロで穴がたくさんあいていました。自分と同じぐらいの年の人が制服に穴をたくさんあけるようなすさまじい威力の原子爆弾の被害にあったかと思うといたたまれない気持ちになりました。

戦争をして幸せになれる人なんていません。核兵器を世界からなくし、その恐ろしさを伝えていかなければ平和にはなれません。今やることは核兵器を開発することではなく、核兵器の恐ろしさを伝え、なくすことです。そのためにこの平和の旅で学んだことを活かし、世界中の人に伝えていくことが必要だと思います。



# 命の尊さ

赤塚第二中学校 2年 菊池 茜音

「助けてー熱いよー。」

周りは炎に包み込まれていた。炎の中を逃げて行く人々は火傷により、全身が膨れ上がっていた。皮膚や、肉が剥がれてしまうが、爪のところで引っかかってしまう。人々は肉が落ちないように両手を正面に伸ばして逃げていた。

第二次世界大戦末期の1945年8月6日午前8時15分。この時を境に人々の生活は今の私達では想像もつかない程、残酷で悲惨なものへと変化した。今の私達の暮らしがどれだけ尊く、大切に、無くしてはならないものなのか。私は、今回の『中学生広島平和の旅』で改めてその事について学ぶ事が出来た。特に印象に残っているのは「中・高生ピースクラブ」による平和学習会で当時11歳だった、瀬越さんの被爆体験講話を聴いた事である。当時の原爆により苦しむ広島の人々の様子がよく分かるお話であった。冒頭の文章は瀬越さんのお話の一部である。私は想像すると怖くて息が重くなっていた。現在の広島で本当にこんな事が起こっていたのかと疑う程であった。平和記念資料館ではその時の人形が三体、飾られているらしい。しかし、今では撤去されている。なぜ撤去されているかという旅行代理店のアンケートに、人形が怖いとの意見があったからである。しかし、本当に撤去されて良かったのだろうか。撤去する事で当時の状況を話で聴く事でしか知る事が出来なくなってしまった。本当にそれで良いのだろうか。撤去し、遠ざける事で私達は広島原爆について目を背ける事になっているのではないかと思う。どんなに残酷で見るに堪えないものでもそれは昔、本当にあった事なのだから、私達はその事実から目を背けず、受け止めて行くべきだと思う。それこそが本当に私達が今後やっていかなければならない課題なのではないだろうか。

最近「死ね」など命を粗末に扱う様な発言を平気で言う人が多くいる。言葉には言霊があり、そんな言葉を言うと相手も自分も傷付いてしまう。どうか自分が言った言葉の重みをよく考えてみてほしい。そして世の中には生きたかったのに生きられなかった人達もいるという事を伝えてあげたい。広島への平和の旅はそんな事を強く願うきっかけになった旅であり、私は今回の平和の旅に参加出来た事を心から本当に感謝したいと思う。



# 広島平和の旅に参加して

赤塚第三中学校 2年 小野澤 花音

私が広島平和の旅に参加して一番強く思ったことは、戦争をして良いことは何もないし、何も得られないということです。当時の日本は今の世の中では有り得ない思考で、戦争に肯定的で、とても深い過ちを犯してしまいました。原爆を落としたのはアメリカですが、戦争を始めてしまったという罪は日本も同じです。原爆という世界で類を見ない被害にあった日本。原爆が投下されたことによって、広島や長崎は今までの生活を送れなくなってしまいました。当時の日本ではとても難しいことだったのかもしれませんが、戦争自体が始めてはいけないことだったのだと感じました。

被爆者の方のお話を伺って、想像するだけでも恐ろしいと感じてしまったのに、実際に被害に遭われた方々の恐怖は計り知れないと思います。あのような小さな兵器で、一瞬で街を壊してしまう怖さ、恐ろしさも教えていただきました。広島に落とされた核兵器「リトル・ボーイ」は長さ 3m、直径 0.7m、重さ 4t ととても小さな核兵器です。「リトル・ボーイ」を日本語で訳すと「少年」です。何故そういった名前になったかと言うと最初は細長い形をしていたので「シン・マン」「やせた男」と呼ばれていましたが、研究が進むにつれ当初より長さが短くなり、小さくなったので「リトル・ボーイ」「少年」と呼ばれるようになりました。

しかし、威力は少年という名前とは程遠く、被爆者の方のお話によると最初はピカッとひかり、目の前のお母さんが見えなくなり、その次に大きなバンツという音が聞こえたそうです。この爆撃により半径 2 km の所ではほとんどの物が吹きとばされてなくなり、その周囲が燃えたり壊れたりしました。

しかし、リトル・ボーイの本当の恐ろしさは、その後の放射能によるものでした。目に見えないその兵器は、爆撃による被害を避けられた人の体の内側をも蝕んでいきました。例え、死を避けられたとしても、原爆症で髪がなくなってしまった方や皮膚がただれてしまった方、その他にも色々な症状があったと聞きました。様々な人がいて原爆がどれだけ人々に害を及ぼしたかを改めて感じました。

核兵器はあってはならないものだと改めて感じました。私が最も強く思ったことは、やはりこの世から核兵器をなくす重要性です。しかし、簡単にはなくせないと思います。だからこそ平和の旅に参加した私達の使命として、見たこと聞いたことを一人でも多くの人に伝えていきたいと思います。

# 平和の旅を終えて

高島第一中学校 2年 田中 黎奈

二日目、バスガイドの方が窓から見える広島街並みを細かく説明してくださいました。その説明を聞いていると、原爆が落とされたことなんて信じられませんでした。原爆ドームを見た時もまるでそこだけ時間が止まってしまったように感じました。朝早くから行われた式典では、多くの方が亡くなった方々のことを思っていてそのうちの一人になれて同じ思いを抱けて改めて、貴重な体験をさせていただいたと思いました。

資料館で見た被爆後の街並みや火傷の写真、被爆者の方が描かれた数々の絵。それらは、当時の広島市を鮮明に想像させてくれるものでした。特に記憶に残っているのはたくさんの絵です。細かく描かれたわけではなく、大まかに被爆者の姿や建物の様子が描かれていて、だからこそ残酷な気がしました。リトルボーイやファットマンなどの原爆の模型、当時の服についた血などが絵と合わさり、その思いを加速させました。焼け死んでしまった人の未練、後遺症によって苦しんだ人の痛み、生き残った人の悲しみ。それらを経験する人が二度と出ないようにしなければならぬと思いました。その思いとともに、平和公園内のたくさんの慰霊碑、折鶴、花を見ていると本当に多くの人々が平和を願っているのだと感じました。

被爆者の方の講話会では、資料館では見られなかった当時の気持ち、行動を聴くことができました。マイクを通して聞こえてくる話にメモを忘れて聞き入ってしまうほどでした。幼い心で感じた『戦争』、母と弟を守る気持ち、父との再会すべてが過去に起こったことだと思うと怖くなりました。最後の質問で「アメリカを恨んでないのか」と聞かれ「恨んでいない」と答えた時の少し柔らかい声が今も耳に残っています。その後のディスカッションでは平和の集いに参加した同年代の人たちと、一緒に戦争をなくすにはどうすればいいか、平和を伝えていくにはどうすればいいかを考え、自分では思いつかなかった案を知ることができ、勉強になりました。私は今すぐ出来ることが思いつかず、苦勞したのですが一緒に考えた人たちは身近なスマホアプリなどで発信する案を考えていて、一層自分の学びを深めることができました。

二日目の夜に行われた灯籠流しは、月が見えない暗闇の中でまるで星のように川を流れていく灯籠がとても綺麗でした。流れて行く灯籠の一つ一つに平和への思いが込められていると思うといつまでも見ていたいと思いました。

三日間という長いような短い時間で本当にたくさんの貴重な体験をさせていただき、多くのことを学ぶことができました。行けてよかったと心から思っています。

# 広島の被害と原爆の脅威

高島第二中学校 2年 木村 優斗

1945年8月6日8時15分に広島に原子爆弾が落とされました。

その原子爆弾たった一発で、広島にあったあらゆるものが壊され、広島の町や山地は破壊されてしまい、その場にいた生き物は熱線、放射線、爆風によって命を奪われてしまいました。

**<青少年平和の集い・被爆者の瀬越睦彦さんからの体験談>** 睦彦さんは爆心地の2km離れた自宅で食事しているときに被爆しました。その時は11歳でした。被爆時、母親は血だらけになってしまいました。原爆が落とされて20～30分後には、黒い雨が降ったそうです。それは、多くの放射線を含んでいたため、雨を浴びた生物はただでは済みませんでした。私はそれらを聞いて、どれだけ原爆が恐ろしかったかを前にも増して感じました。また、事前学習では知らなかった『黒い雨』という存在を知り、さらに被爆者がどれだけ過酷だったか知り、二度と原子爆弾は使ってはならないと思いました。

**<平和記念式典>** 式典では、安倍首相や、海外からの人、小さな子供たちも参列していました。黙とうをしている時、世界中の人々が平和を願い、亡くなった人たちへのご冥福を祈っているのが感じられました。これまでに被爆者は、31万4118名がなくなりました。今でも原爆の後遺症に苦しんでいる人がいると知って、原爆は73年たった今でも、人体に悪い影響をおよぼす、恐ろしい兵器だとさらに思いました。

**<平和記念資料館>** ここでは、原子爆弾の開発の経緯、原子爆弾を禁止させるための活動。そして、放射線によって全滅した鯉、出血したり毛が抜けてしまった鳥、傷や白血球の減少があった馬、焼け焦げたり、爆風によって折れた木の被害等の資料が展示されていました。原爆は人だけでなく他の生き物にも大きな被害を及ぼすため、原爆を持つことは地球全体への脅迫だと思いました。



**<最後に>** 私は広島の前爆の被害や、現在の活動について学んだなかで、戦争は絶対してはならないと思いました。また、原爆は爆心地に近いものは瞬時に命を奪ってしまう。命を取り留めても、原爆の後遺症によって、今でも苦しんでいる人がいると知りました。二度と原爆による犠牲者を出さないためにも、原爆についての訴えや平和についての活動に我々も協力し、その活動を強化すべきだと思いました。

# 「ヒロシマ」にしか伝えられないこと 被爆地「広島」でしか学べないこと

高島第三中学校 2年 鈴木 蒼菜

私は目で見て、耳で聴いて、心で感じるということを意識し、被爆地広島を訪れました。

「目で見た」平和記念資料館。

全身大火傷や後遺症、写真や遺品はどれもとても生々しく、目を背けたくなるような展示品ばかりでした。中でも一番印象に残ったのは、当時3歳だった伸一ちゃんの三輪車です。

伸一ちゃんは、三輪車に乗って遊ぶのが大好きで、8月6日の朝も爆心地から1.5km離れた自宅の前で遊んでいました。

8時15分に原爆が投下され、三輪車とともに熱線で焼かれた

伸一ちゃんは、その夜に苦しむ声や呻き声、唸り声があちこちでするこの広島で亡くなったそうです。そのことを想像すると、胸が締め付けられました。

「耳で聴いた」ヒロシマ青少年平和のつどい。

被爆者の瀬越さんの被爆体験を聴き、私は平和とはどのようなことかを考えさせられました。瀬越さんが当時11歳のときに爆心地から2km離れた自宅で被爆したお母さんの背中の様子や皮膚を垂れ下げて歩いていた人々の話等、印象に残るお話が多くありました。瀬越さんは、「戦争そのものに怒りがあるから、原爆を落とした国に憎しみはない。」とおっしゃっていました。私は、憎しみはないとおっしゃったことには、とても驚くとともに、それほど戦争は辛いものなのだと感じました。被爆体験を聞き、平和とは今ある生活一つひとつのことだと思いました。一日三食美味しいご飯が食べられること、学校へ行き勉強ができること、夜は安心してゆっくり眠ることができること…。不自由のない、当たり前な生活が送れていることこそが平和であると痛感させられました。



「心で感じた」平和記念式典。

当日は猛暑にも関わらず、多くの方が参列していました。海外からの参列者も多く、日本だけでなく海外からも広島そして原爆に対する関心があるのだと改めて感じました。夜に流された灯籠の中には、様々な外国語で言葉が書かれているものがありました。日本人も外国人も、平和への願いは同じであると気付かされました。



私はこの三日間、被爆地広島でしか得ることのできない貴重な経験により、改めて戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを学ぶことができました。活字や映像からは学ぶことのできないこと、実際に見聞きすることでしか得られない事実を知り、考えさせられたこの経験を大切に続け、伝えていきたいと思えます。





# 第2部

## 第8回 中学生長崎平和の旅



平和祈念像前にて

### 参加生徒

板橋第一中学校	佐藤みのり	志村第四中学校	石井 雫	桜川中学校	佐藤 美桜
板橋第二中学校	藤井 里奈	志村第五中学校	伊東 樹里	赤塚第一中学校	田村 茉莉
板橋第三中学校	村上 花笑	西台中学校	岩淵 士和	赤塚第二中学校	半瀬 優香
板橋第五中学校	神尾捺々美	中台中学校	山崎 達哉	赤塚第三中学校	武井 智那
加賀中学校	佐藤 健心	上板橋第一中学校	町田 七佳	高島第一中学校	福田 蒼依
志村第一中学校	安藤 詩月	上板橋第二中学校	高橋 せら	高島第二中学校	小室友妃花
志村第二中学校	吉川 舞衣	上板橋第三中学校	鶴田 歩実	高島第三中学校	佐々木志穂子
志村第三中学校	宇高 希美				

### 引率者

高島第三中学校 飯塚 正人校長（団長） 濱守 尚美教諭（指導員） 渡邊 修一郎教諭（指導員）

## 中学生長崎平和の旅 行程表

実施期間 平成30年8月8日～10日（2泊3日）

### 8月8日(水)

時 間	行 動 内 容
7:00	板橋区役所集合・出発式
7:30	板橋区役所 発
8:40	羽田空港 着
9:50	羽田空港 発
12:00	長崎空港 発(観光バスで平和公園へ)
13:10	平和公園 着
13:40	★青少年ピースフォーラム受付
14:00～17:00	★開会行事(被爆体験講話) ★被爆建造物等のフィールドワーク(浦上天主堂コース)
17:50	平和公園 発
18:30	ホテル 着
19:15	夕食
22:00	就寝

### 8月9日(木)

時 間	行 動 内 容
6:00	起床
7:00	朝食
7:45	ホテル 発
8:50	平和公園 着
10:35～11:45	平和祈念式典参列
12:00	昼食
13:30～16:15	観光
17:00	ホテル 着
18:00	夕食
19:00	学習会
22:00	就寝

### 8月10日(金)

時 間	行 動 内 容
6:00	起床
7:00	朝食
8:10	ホテル 発
9:00	原爆落下中心地 着(献花、折鶴奉納)
9:30～11:00	長崎原爆資料館・追悼平和祈念館見学
11:10	原爆資料館発
12:00	昼食
13:00	長崎空港 着
13:45	長崎空港 発
15:25	羽田空港 着
15:50	羽田空港 発
17:30	板橋区役所 着・解散式

★は青少年ピースフォーラム事業(長崎市主催)

# “こよなく晴れた 青空”

第8回中学生長崎平和の旅  
団長 飯塚 正人  
(高島第三中学校長)

“こよなく晴れた 青空を 悲しいと思う せつなさよ”これは平和祈念式典で歌われた「長崎の鐘」の歌い出しの一節です。1945年8月9日、午前11時02分、雲一つない晴天でした。現在の澄み切った美しい海や山、青空と同じだったと思います。この活気に満ちた長崎の街並みを見ると、73年前のあの日、一発の原子爆弾で多くの人の命が一瞬で失われた事実は今では信じがたいものとなっています。ここまで復興させるためには、多くの方々の血のにじむような壮絶な苦勞と努力、そして平和への強い思いや願いなくしては果たせなかったと感じました。

先の戦争から70年以上が経過し、平和に対する意識が希薄になり、日常生活において「戦争の悲惨さ、平和の尊さ」を感じたり考えたりすることが難しくなっています。そのような中で、未来に生きる板橋区の中学生22名が平和の旅として長崎を訪れたことは、大変貴重な機会となりました。

「青少年ピースフォーラム」での「被爆体験講話」やピースボランティアの方と暑い中汗を流しながら巡った「被爆建造物のフィールドワーク」をはじめ、「平和祈念式典」「長崎原爆資料館」の見学などを通じて、「戦争の悲惨さ、平和の尊さ」を改めて感じ、平和に対する考えを深めることができたと確信しています。

特に被爆体験の話は、中学生にとって貴重な体験になったと共に戦争の悲惨さを痛感し衝撃を受けたことと思います。被爆当時の状況は生き地獄であり、その様子を話すことは心を切り裂かれるように辛いことです。その魂の叫びともいえる話を次世代に伝えていくのは長崎の方々和被爆体験の話を通じて直接聴かせていただいた私たちです。

また平和祈念式典での「平和への誓い」で被爆代表者の田中熙巳（たなかてるみ）さんは、今でも地獄の惨状を脳裏から消し去ることができない中、「私は、多くの先人たちの働きを偲びつつ、速やかに核兵器禁止条約を発効させ、核兵器もない戦争もない世界の実現に力を尽くしていく」と述べました。その力強い訴えに拍手はいつまでもなりやまず、式典参加者すべての心が一つになった瞬間であり感動を覚えました。

今回、長崎平和の旅に参加した22名の中学生は、長崎の方々の様々な思いや願いをしっかりと心に刻んで板橋に戻ってくることができました。これも随員職員の献身的な取組なくしては果たせなかったと、改めて区関係者の皆様に深くお礼申し上げます。

旅のすべてが「戦争の悲惨さ、平和の尊さ」を自分の目で見て、耳で聴いて、肌で感じて、そして心で学んだ意義ある時間でした。このことをたくさんの人々に伝えていくことが22名の使命です。私たち一人一人が今回この長崎の空の下で感じたことや学んだこと、そしてこれから考えていかなければならないことを自分の言葉で必ずや伝え続けていきたいと思います。

平和で幸せな“こよなく晴れた青空”が永遠に続くためにも！

# 平和の尊さ～長崎の旅で学んだこと～

板橋第一中学校 2年 佐藤 みのり

1945年8月9日午前11時2分、たった一発の原子爆弾が長崎の空に炸裂しました。原子爆弾、通称『ファットマン』はたった一発で多くの命を奪い、長崎の町は一瞬で火の海と化しました。

## ●被爆体験講話

1日目には、被爆者の方のお話を聞きました。私たちは、当時4歳8ヶ月だった小峰秀孝さんにお話を聞くことができました。小峰さんは爆心地より1.5キロメートルの自宅近くの畑で被爆し、両手、両足、腹を火傷し、足は3回手術を受けました。3回手術を受けた後も足が曲がらず、まっすぐ歩けないと小峰さんはおっしゃっていました。また足のせいで、学校では精神的いじめを受けていました。

「人生は辛いことの連続、戦争のない世界を作れ。人間が作ったものは人間が壊せる。君たちはそのハンマーになれ。」

これは小峰さんが私たちに向けておっしゃってくれた言葉です。私はこの言葉を受け、自分たちで変えていかなければいけないという思いが、一層強まりました。

## ●原爆資料館

3日目には原爆資料館を訪れました。右の写真は長崎に投下された原子爆弾『ファットマン』です。長さ3.25メートル重さ4.5トン直径1.52メートル燃料はプルトニウムが使われ、弾発威力は約22キロトンもの大きさでした。この威力は広島に落とされた原子爆弾『リトルボーイ』の約1.5倍の威力でした。その他にも、被爆した方の火傷の跡の写真など、思わず目を背けたくなるような写真が多数展示されていました。これらの写真を見て、もう2度とこんな思いをしてほしくないという気持ちがこみ上げてきました。



## ●終わりに

この旅では、平和の尊さ、戦争の愚かさを学びました。私はこの旅を通して皆さんに伝えたいことがあります。それは、武力ではなく、話し合いで解決できる世の中を作りたいということです。世界にはまだ核兵器として使用できる核弾頭が、約15,000発あるといわれています。世界中の皆さんがハンマーになり、核兵器をこの世の中からなくしましょう。

最後になりましたが、このような貴重な体験をする機会を与えてくださった板橋区役所の方々、長崎の皆さん、先生方、本当にありがとうございました。

# 日常が奪われないために

板橋第二中学校 2年 藤井 里奈

日本では「平和」が当たり前となり、戦争の悲惨さを考える機会が減ってきています。今から73年前の1945年8月9日午前11時2分、アメリカが長崎に原子爆弾を投下しました。たった一発の原子爆弾で、人々の日常は奪われ、7万4千人を超える方々が亡くなりました。私は、原爆の被害、戦争の悲惨さ、平和の尊さを伝えたいと思い、長崎平和の旅に参加しました。

## 〈被爆体験講話〉

青少年ピースフォーラムで、小峰秀孝さんの講話を聴きました。小峰さんは、当時4歳8ヶ月で、爆心地から約1.5kmの自宅近くの畑で被爆しました。小峰さんの話を聞いて、印象に残ったのは

「核兵器は人が作り、人が壊せる。だから、核兵器を壊すハンマーになってほしい。」という言葉です。私達若者がハンマーとなって、核兵器の無い平和な世界を実現しなければならぬと強く思いました。

## 〈被爆建造物等フィールドワーク〉

ピースボランティアの方の説明を聴きながら、被爆建造物を見学しました。爆風のみで丈夫な建物も動いてしまうということや、建物が物語る当時の被害や暮らしを学ぶことができました。また、原爆の仕組みや原爆が落とされるまでの流れが分かりました。自分の言葉でこの現実を伝え、受けついでいくことが、私達日本人の使命だと思いました。

## 〈平和祈念式典に参加して〉

平和祈念式典の会場には、大勢の人が参加しました。被爆者合唱「もう二度と」の堂々たる歌声が響き、平和祈念式典は開会しました。そして、午前11時2分、鐘が鳴り響く中で黙とうをしました。平和を願う人々の気持ちが伝わる黙とうでした。

## 〈長崎平和の旅を終えて〉

貴重な経験をさせてくださった板橋区役所の方々をはじめ、長崎の関係者、ボランティアの皆様、先生方、家族に感謝を申し上げます。

戦争からは、苦しみしか生まれません。当たり前の日常が、どれほど幸せなのでしょう。今まで苦しんできた方々のためにも、戦争の悲惨さ、平和の尊さ、原爆の恐ろしさを伝え、次の世代へ受けついでいきたいです。



# 世界の平和のために

板橋第三中学校 2年 村上 花笑

73年前、長崎に投下された一発の原子爆弾によって人々の生活は変わり果ててしまいました。

## <青少年ピースフォーラム>

被爆体験講話では、被爆当時4歳だった小峰秀孝さんのお話を聞かせていただきました。小峰さんは原爆によって、体にケロイドや傷跡が残り、皆の笑い者にされ、何度も死のうと思ったと話されていました。なにも罪がないのに被爆者というだけでいじめられる辛さは、想像するだけで耐えきれませんでした。

フィールドワークでは、被爆建造物を見学しました。現地の学生のボランティアの方が案内してくださり、平和意識の高さに驚きました。私は多くの人に今回学んだことを伝え、私達ももっと平和への考えを深めていかなければいけないと思いました。

## <平和祈念式典>

式典の中で、日本政府に対し核兵器禁止条約に賛同するよう求める声が多く聞かれました。被爆者の平均年齢も80歳をこえる今、唯一の戦争被爆国である日本が先陣をきって非核化を進めるべきではないかと思いました。また、そのためには私達一人ひとりの声が必要なのだと強く感じました。

## <長崎原爆資料館>

資料館には原爆が落とされた経緯から後遺症まで様々な展示物がありました。しかし、私が印象に残ったのはガイドの方のお話です。「会話をしなさい。平和は会話から始まります。」と何度も力強くおっしゃっていました。日本とアメリカも上手く話し合えていれば、原爆が使用され、こんなにも多くの命が失われることはなかったのではないのでしょうか。ガイドの方から、自分の気持ちを伝えあい、お互いに理解しようとする大切さを学ぶことができました。

今、当たり前のように生きていることはとても幸せなことであり、それは被爆者の方々や長崎の人々による復興と平和への思いからできていると分かりました。長崎を最後の被爆地とするために、私達の世代が平和な世界をつくっていかねばなりません。身近にできることを、皆が取り組んでいけば必ず実現できると思います。今回多くを学んだ私達がその中心となって行動し、原爆投下の過去を無駄にしないようにしていきたいです。

# 長崎で学んだ人々の思い

板橋第五中学校 2年 神尾 捺々美

私はこの3日間で、戦争に対するの怒りと被爆の恐怖を知った。最も大きくそう感じたのは、被爆者の小峰さんの話だった。

今までは、原爆の被害を受けて体がボロボロになっけていても、命が助かって生きているということが、その人にとって幸せなのだろうと勝手に思っていた。しかし、それは間違っていた。ボロボロの体が『いじめ』の元となり、「死にたい」とすら思っていたなんて知らなかった。では、どうして小峰さんはこうして生きていらっしゃるのか。また、思い出したくもない記憶を、どうして私たちに話して下さったのか。その答えは、「家族の愛があったから」と、おっしゃっていた。私は最初、この言葉に疑問を持った。人間は愛で助かるのか。決して現実的ではないし、ありえないと思った。だが、本当にある。小峰さんがここに立っていること、これこそが本当にあるという証拠だ。小峰さんは、「家族がいなかったら、きっと自分はいなかった」と、おっしゃっていた。家族に支えられていたから、小峰さんは生きることができた。また、小峰さん自身の気持ちの持ち方も重要だったと思う。人の考え方というものは、まだ科学的には分からない。けれど、家族の愛が小峰さんの命を救ったというのは確かだ。私だって、1人では生きていけない。人というのはこういう生き物だと思う。これは、昔であろうと、今であろうと、未来であろうと変わることはないと思った。

長崎に住む人々の頭の片隅には、常に『原爆』という文字があると思う。世界中の人々に原爆の恐ろしさを知ってもらい、平和を願っている。これは、広島に住む人々も同じだ。しかし、その思いを、私は気づくことができていなかった。広島と長崎に原爆が落とされたという事実は、小学校でみんな習うが、深いところまではなかなか気づかない。被爆者は、体の痛みだけでなく、心も傷ついていたこと。また、今でも苦しんでいる人が大勢いるということ。当たり前前に過ごしていた日々が、たった1発の爆弾で狂い、変わってしまったこと。私たちには想像もつかないようなエピソードが、長崎に詰まっていた。長崎に住む人々は、実際に原爆の被害にあっていなくても、たくさんの方々のことを詳しく教えて下さった。被爆者の方々も、私たちに原爆の恐怖を話して下さった。広島と長崎の人々の思いを、たくさんの方に知ってほしい。ところが、新しい世代になっていくにつれて、原爆への恐怖心が薄れていってしまうと思う。そのため、広島や長崎に行くのには意味がある。より現実的に、過去から学ぶことができる。私も、長崎へ行ったことで自分や、世界について、見つめなおすことができた。できればほかの人たちも、話を聞くだけでなく、実際に広島や長崎に足を運んでほしい。広島と長崎の人々の声を、心で感じてほしい。

# 核兵器廃絶宣言 ~Our future is bright~

加賀中学校 2年 佐藤 健心

1945年8月9日11時2分、長崎に住む人々の日常を一瞬にして奪い去ったものがある。「原爆」という悪魔の道具だ。爆心地から半径1km以内にいた人はほとんどが死亡し、奇跡的に一命をとりとめた人も現在まで後遺症に苦しんでいる。実際に後遺症に苦しんだ経験のある小峰秀孝さんにお話を伺った。原爆による後遺症で幼少期からいじめられ、社会に出てからも差別されたそう。僕はこのお話を聞いたとき、一人の人間としての人権はないのだろうかと思った。

また、平和祈念式典に参列して思ったことは、日本だけでなく全ての国が平和になれば、本当の平和はおとずれないということだ。近年、原爆の数は減少してはいるものの、世界中に約1万発以上の核兵器がある。この1万発を多いと感じるか少ないと感じるかは人によって異なる。ぼくは、多いと感じる。原爆をはじめとする核兵器をこの世から廃絶させなければ平和はおとずれない。

では、平和とはなんなのか、核兵器を無くした世界はどうなるのか。僕の考える平和とは、「お互いが自らの力を誇示しようとせず、勝ち負けではなく進化を求めること」だ。自分の力を相手に認めさせるために武力行使をすれば、戦争はこの世の中から無くなることはない。相手の力を認め、吸収して自分も成長していく。人間は他人と比べたがるが、比べるだけでは進化していかない。自分に足りないものを自覚し、相手から学ぶことで人は進化していくと思う。このように1人1人が進化していけば、いずれ核兵器のない平和な世界へと進んでいくと思う。



今現在が世界の成長の果てだろうか。現代を生きる僕たちには未来のことはわからないことだらけだし、世界はこれからも進化していくと思う。進化した世界の先が、核兵器に恐怖心を抱く人や苦しむ人がいない世界になってほしいと思う。そのために、地球上から核兵器の数をゼロにすることが大切だと思う。よって、僕は自分自身に核兵器廃絶宣言をする。「僕は長崎平和の旅を通じて、原爆、核兵器の恐ろしさを改めて痛感した。もう二度と核兵器が使われないように。そして、長崎が最後の被爆地になるように核兵器の酷さや平和な世界の重要性を後世に伝えていく。明るい未来のために。」

# 永久平和のための私の願い

志村第一中学校 2年 安藤 詩月

## 【はじめに】

1945年8月9日11時2分、1つの原子爆弾が長崎の街に落とされました。辺り一面焼け野原となり、多くの尊い命、当たり前の日常、建物などの全てを奪いました。それから73年の月日が経った今でもその深い爪跡は残っています。なぜ、戦争は起こり原爆が使われ、大勢の人が亡くなったのか。その経緯を知るために平和の旅に参加しました。

## 【被爆体験講話会】

実際に被爆をした小峰さんに話を聞きました。被爆当時4歳だった小峰さんは両手、両足、腹に火傷を負い3回手術をうけました。少年時代は火傷した足を見てあざ笑う子もいたそうです。小峰さんは被爆し、私達の想像を絶する程の苦しみを受けました。それを聞き、胸が張り裂けそうになりました。被爆し、後遺症があっても私達と同じ「人間」です。なのに、あざ笑うのは間違いだと思います。傷ついている人には手を差し伸べて助けるのが当たり前のこと。たとえそれが原爆の傷であっても同じことです。この話を聞き、私は「今後核兵器による犠牲者を出してはならない。そのためにも自分達が戦争をしてはいけない、止めなければならない」と、強く心に誓いました。

## 【原爆資料館】

この原爆資料館には遺物、折れ曲がった櫓、熱線によって溶けた瓶など様々な資料が展示されていました。右の写真は11時2分を指して止まった柱時計です。爆風で損傷していますが、長崎の街が一瞬で破壊されたことを物語っています。他にも、遺骨が付着した兜やガラスがありました。それらは今も、亡くなった犠牲者が助けを求め、訴えているように感じました。直ぐに病院に運び手術をすれば助かる人もいたかもしれません。そう思うと、悲痛な叫びが心に聞こえてくる気がしました。



## 【最後に】

今なお、戦争や紛争により苦しんでいる人、怪我や後遺症を抱えながら生きている人はたくさんいます。そんな彼らを救えるのは、同じ「人間」である私達ではないのでしょうか。苦しむのを黙って見過ごすのではなく、手を差し伸べるべきだと私は考えています。戦争は多くの尊い命をうばい、悲しみや苦しみを生み出します。そのようなことは決して行ってはならない行為です。誰もが永遠に平和で安全に暮らせる「永久平和」が私の願いです。その為に次世代を担う私達が戦争の悲惨さを伝え、未来に繋ぐそれが私達の課題だと思います。

# 平和のバトンをつなぐ

志村第二中学校 2年 吉川 舞衣

## 【参加の目的】

73年前の8月9日、長崎では何が起こっていたのか、実際に話を聞いて自分の目で見たいそんな気持ちからこの長崎平和の旅に参加しました。

## 【被爆体験講話】

「早く俺を殺して」

これは被爆当時4歳8か月だった小峰秀孝さんがその後やけどに苦しみ叫んだ言葉です。医療品など全てのもものが不足していたため十分な手当が受けられず、医者に診てもらったことができた時には「死にます」と言われました。なんとか生き残った後も被爆の後遺症による差別などでとても苦しんだそうです。私はこの話を聞いて、たった一瞬の出来事がその後の長い人生を狂わせてしまったことにとても驚きました。

## 【平和祈念式典】

今回長崎に初めて国連事務総長としてアントニオ・グテーレス氏が参加されました。核兵器廃絶と長崎を地球最後の被爆地となるよう強く訴えていました。私は長崎の原爆に対する世界中の関心が高いことを実感しました。世界にもっと原爆の怖さを知ってもらいたいと思いました。

## 【長崎原爆資料館】

11時2分で止まったままの時計、浦上天主堂の惨状、被爆した長崎の模型を見て、本当にこの地であったのだと衝撃を受け鳥肌が立ちました。放射能の被害はあまり被害を受けていないように見えても何年後かに発病し死に至ることがあると知り、とても怖くなりました。特に爆風や熱線などにより皮膚が焼けただれた写真は、当時の悲惨な惨状を表していて胸が痛くなりました。

## 【まとめ】

長崎平和の旅に参加して原爆の威力や被害について知ることができ、平和の尊さを学びました。原爆投下から73年が経ち被爆者の平均年齢が82歳になった今、私たちは直接話を聞ける最後の世代です。今回私は平和の旅で決して忘れることのできない体験をすることができました。それとともに次の世代へ原爆の悲惨さを伝えていかななくてはならないという責任を深く感じました。



# 長崎で学んだこと

志村第三中学校 2年 宇高 希美

8月9日。今までは原爆について深く考えることはありませんでした。しかし今年、平和の旅に参加することでこの一日が戦争の恐ろしさや平和の尊さについて学べる日となりました。

## 【青少年ピースフォーラム】

被爆体験講話会では当時4歳で被爆された小峰秀孝さんにお話を伺いました。小峰さんは始めに「当時は小さかったのでよく覚えていないが終戦後、被爆者がどう生きてきたかについて知ってほしい」とおっしゃっていました。両手・両足・腹部を火傷し、足は3回手術を受け、薬も無かった当時は家族がつきっきりで看病していたそうです。また小峰さんは、今の人達に核兵器を壊すハンマーになってほしいと期待しているそうです。私はその力強い声を聞いてもうこんな悲惨なことは二度と起こしてはいけないと強く思いました。

## 【平和祈念式典】

式典の会場は多くの遺族席が準備されており、その席が満席になったときはこれだけ罪のない人達がたった一発の爆弾でこの世を去っていったのだと目で見て感じる事ができました。現地に寄せられたたくさんの千羽鶴も一人一人の命のように見えました。式典では原爆に対する歌や当時を思い出させる歌、平和を願う歌などが小学生から大人まで幅広い世代に歌われていました。その中でも私が心に残ったのは2004年に結成された被爆者合唱の「もう二度と」です。この曲の歌詞には『もう二度と作らないで わたしたち被爆者を』という言葉が繰り返し使われています。この歌は被爆者だからこそ心に響く歌なのだと思います。そして私達もその願いのバトンをつないでいきたいです。

## 【長崎原爆資料館】

資料館では特に、爆弾が落ちた近くにいると洋服がはぎとられる、頭が吹き飛ぶ、妊婦さんから赤ちゃんが飛び出るなどの被害をもたらす爆風の様子の写真に驚きました。爆発力も4トン積みのトラック約5200台分だと聞き、最初は大きすぎて想像があまりつきませんでした。しかし、展示されている一つ一つからその威力や残酷さが感じられました。被爆地に残された少女や広島で被爆したにも関わらず、長崎でも被爆した人の話を聞くと胸が締め付けられるようでした。沢山の資料から73年間の命の重さがひしひしと伝わってくるような場所だと思います。

私はこの長崎平和の旅に参加して、やはり実際に行き自らの目や身体で感じてくる事の大切さを学ぶと共に命の重さ、平和の尊さが身に染みるように感じられました。私はこの貴重な体験をいかして身近な人から伝えていきたいと心から思いました。

# 恒久平和の実現へ

志村第四中学校 2年 石井 雫

1945年8月9日、午前11時2分、長崎に一発の原子爆弾が投下されました。今回の長崎平和の旅で、戦争の悲惨さ、平和の尊さについて考えると同時に、私は、将来、通訳として、世界の方々と交流を深める中で、平和な世界を実現できるよう、学んだことを発信していきたいとより一層強く思いました。

## ＜被爆体験講話会＞

私たちは、被爆者である小峰秀孝さんから、被爆体験についてお話をうかがいました。小峰さんは、当時4歳8ヶ月で、爆心地より1.5kmの自宅近くの畑で被爆し、両手、両足、腹を火傷し、足は3回手術を受けました。火傷した足は、うじ虫がわき、肉に食い込み強い痛みがあったそうです。そのあまりの痛みから、「早く俺を殺して」と言っていたそうです。また足に肉のかたまりができて曲げられず、さらに麻痺してよく転んでいました。周りの子供達からも嫌なあだ名を付けられて精神的にも、肉体的にもいじめに苦しみ、恥ずかしさと憎しみを感じました。その後、涙をこらえ苦痛に打ち勝ったとお話しされていましたが、いじめられていた過去を消し去ることはできなかったと思います。私は、一発の原子爆弾でその人の人生が変わってしまうことから二度と戦争を起こしてはならないと強く感じました。

## ＜平和祈念式典＞

式典に参加して印象に残ったのは、長崎平和宣言をしていた長崎市長の田上富久さんのお話です。田上さんは、平和な社会の実現に向けて、世界の国の人たちとの交流をすること、相互理解を深めること、平和の文化を世界に広げていくこと、自分の好きな事や得意な事で思いを伝えることが私たちにできることだと話していました。また現在は、核兵器廃絶1万人署名活動も高校生によって行われています。この活動は式典でお話をされていた被爆者代表の方、そして戦争体験者すべての方が願っていることだと思います。1日でも早く良い結果となるよう私たち一人一人が責任をもち、今できる事を考えていきたいです。

## ＜長崎原爆資料館＞

資料館では、平和案内人の方に長崎の原爆についてお話をいただきました。長崎に投下された原子爆弾は、ファットマンと呼ばれ、長さ3.25m、直径1.25m、重さ4.5tにもなり、そのエネルギーの内訳は爆風約50%、熱線約35%、放射線約15%で、大きな被害をもたらしました。その一発が家族を失い、まだ残されていた人生を奪い、罪のない人々に苦しみを与えました。資料館には、当時の人々の作業服や熱によって溶けたガラス瓶などが展示され恐るべき威力が伝わりました。原子爆弾を過去のこととして流さず、世界中がこれから平和で幸せに生きていけるよう、私たちが伝えていかなければいけないと思いました。

# 長崎平和の旅に参加して

志村第五中学校 2年 伊東 樹里

私は、今回の長崎平和の旅で初めて長崎県に行きました。最初は、自然豊かで歴史的な建造物がたくさんあるこの場所が、73年前に焼け野原になったとは思えませんでした。

しかし、原爆で35mも吹き飛ばされ地面に突き刺さった鐘楼を見て、本当にこの場所に原爆が投下され、大きな被害を及ぼしたんだなと思いました。

## ～被爆体験講話～

初日、当時4歳8か月だった小峰さんの被爆体験をお聞きしました。小峰さんは、両手、両足、腹を火傷し、足は3回も手術を受けたそうです。火傷してしばらくすると、放射線の影響で足が変形してしまったり、ケロイドを起こしたり、皮膚が所々盛り上がってしまいました。その外見のせいで、小学校ではいじめられ、外を歩くと指をさされ気味悪がられたそうです。社会に出てからは、被爆者は働くことも結婚することも難しく、小峰さんを含む多くの方が自分が被爆者だということを隠していました。小峰さんは戦争が終わっても差別に苦しみ続け、何度も真剣に自殺を考え、実際に自殺を図り未遂になったこともあったそうです。

私は小峰さんのお話を聞いて、原爆は建造物などの物だけでなく人生も破壊してしまう恐ろしく残酷なものだと思いました。また、同時にもう2度と小峰さんの様な思いをする人をつくってはいけないと思いました。

## ～私にしか出来ないこと～

ピースフォーラムでボランティアの方々が自分にしか出来ないことを考えてみてくださいとおっしゃっていました。私にしか出来ないこと、それは「伝える」ということだと思います。

平和祈念式典には71の国や地域の方々が出席し、街のいたるところに、世界中から寄せられた銅像や千羽鶴があり、世界中の人々が平和を願っていることをとても強く感じました。

しかし、被爆者の平均年齢は82歳になり、小峰さんは私たちが被爆者に話を聞くことの出来る最後の世代だとおっしゃっていました。今回の長崎平和の旅で見たり聞いたりしたこと、思ったり考えたりしたことを、最後の世代から引き継ぎ、次の世代にしっかりと伝えていきたいです。

# 平和への意識

西台中学校 2年 岩渕 士和

73年前の8月9日11時02分、長崎の上空約500mで原子爆弾が炸裂し、原爆による熱線と爆風は瞬間的に長崎の街を襲いました。その際、約7万4000人の死者と約7万5000人の負傷者を出し、そしてほとんどの建物を破壊し、長崎を焼け野原にしました。そんな事実を僕は長崎平和の旅で、自分自身で見て、聞いて、触れて、感じ、学んできました。

## 1. 被爆体験講和

1日目の青少年ピースフォーラムの一環として小峰秀孝さんという被爆者の方のお話がありました。小峰さんは両手、両足、腹部を熱線によって火傷し、足だけでも3回手術をしたそうです。この傷からでも十分に原爆の悲惨さが感じることができましたが、僕の中でそれ以上に印象に残り、原子爆弾を二度と使ってはいけないと意識させられた話は被爆者のその後です。

4歳で被爆した小峰さんの火傷は、小学生の時にはまだ色濃く残っていました。そのため、入学式では先輩に笑われ、同級生には「腐れ足」、「鳥の足」と言われ馬鹿にされた挙句、暴力まで振るわれるという、いじめを受けました。そして小学校、中学校と卒業した後も、小峰さんは就職でも不利な状況に置かれました。希望していた店には「被爆者だから雇えない」とことごとく断られ、最終的には被爆者だということを隠して就職したそうです。また女性と付き合っても自分が被爆者だと相手に知られると別れられたそうです。僕は小峰さんをはじめ、被爆者の方々は何も罪がないのに、世間はここまで冷たくあたるのかと、衝撃を受けました。

## 2. 長崎原爆資料館

長崎原爆資料館では、核爆弾の模型や被爆者の方の写真、熱線による被害の写真などを見ました。特に被爆者の方々の怪我の写真や、亡くなられた方の前で立ち尽くす子供の姿は戦争の理不尽さそして悲惨さ、原子爆弾の威力、恐怖を如実に物語っていました。

また、被爆者遺族の方であるガイドさんは度々「会話は大切」だと仰っていました。そこには、家族が被爆し、亡くなられたからこそ抱く平和への強い願いと、そのためには会話が大切であるという自らの信念が感じられました。

## 3. 長崎平和の旅を通して

僕は今回の旅を通して、意識の差というものを感じました。長崎の青少年ピースフォーラムのような若い世代の方々は平和への思いを受け継ぎ、周りに発信しています。また小峰さんのような語り部活動は東京よりも頻繁に行われているそうです。僕たちは実際に被爆していないので、被爆者の方々の平和への思いなどを全てくみ取ることは難しいです。それでも僕は、原爆について、平和について全員に考えて欲しいと感じました。

# 長崎を最後の被爆地に

中台中学校 2年 山崎 達哉

73年前の8月9日、11時2分。長崎にたった一発の原子爆弾が投下され、何万人もの尊い命が、一瞬にして奪われました。73年前の出来事なのですが、現在も放射線や傷などから多くの被爆者を苦しめています。私は今回の3日間を通じて、被爆者の方々の辛さ、原爆、戦争の悲惨さを学び、感じることができました。

1日目。私は被爆体験者の講話を聞きました。被爆体験者の小峰さんという方が被爆後73年間生きてきた大変さを語ってくれました。講話を聞いていくにつれて、小峰さんの悲しい気持ち、辛かった毎日に私も心が痛くなりました。特に小峰さんが就職先を探すときに「被爆者」ということで差別を受けた話は印象に残っています。なぜ悪いことをしていないのに、差別を受けなければならないのかという疑問と同時にとても悲しい気持ちになりました。

2日目。私は平和祈念式典に参列しました。式典の2時間ほど前から平和公園に行きました。開始を待っている際も、被爆者の方々や、参列された方々の平和を願う気持ちを肌で強く感じ、それは私の想像をはるかに超えるものであることがわかりました。そして式が始まり、1分間の黙とうの時間となりました。この1分間は今まで経験したことがないほど長い時間でした。そして、言葉にならないような悲しみが出てきました。私がこの経験の中で一番印象に残ってるのはこの場面でした。また、一番驚いたのは、国連事務総長の演説終了後と安倍内閣総理大臣の来賓挨拶後の拍手の音の大きさや長さの違いでした。国連事務総長の非核化に向けた演説は、力強く、私以外の方々も心を動かされたのではないかと思います。その後の安倍内閣総理大臣の言葉では、ほとんど昨年と変わらない挨拶を行い、周りの方々の顔というのは険しく、怒りに満ち溢れていました。私は、小峰さんや被爆者の方々の思いを生かしてほしいと強く思いました。

3日目。私は原爆資料館に行きました。そこで原爆の威力、被爆者の体の傷の数々、そして私の世代や、次世代に伝えるための「会話」がまだまだ必要だと感じました。まだアメリカはたくさんの核兵器を所持しています。もう同じことを繰り返してはいけないと伝えるためにも、「会話」が必要だと感じました。

私は今回の3日間で思ったことは長崎を最後の被爆地にしなければならないと感じました。そして、簡単ではないですが、核兵器は捨て、世界全体で平和を目指さなければと思います。私も今回の3日間で得たものをたくさんの人へ語り継いでいくことが大切であり、私の責任であると考えます。



# 長崎平和の旅に参加して

上板橋第一中学校 2年 町田 七佳

第8回中学生長崎平和の旅に参加して、貴重な体験をするとともに、決して忘れてはいけない大切なことを学びました。

長崎に到着して、まず被爆体験者の小峰秀孝さんの講話を聞きました。小峰さんは当時4歳で、爆心地より1.5kmの自宅近くの畑で被爆しました。原爆で生き残っても次は放射線への恐怖があったそうです。小峰さんは両手、両足、腹に火傷を負い、足は3回手術を受け、死はまぬがれましたが、学校や職場では、「被爆者だから」ということで、肉体的、精神的に過酷ないじめを受け、希望していた職にも就くことができなかつたとお話を聞いていました。一度の戦争、一発の爆弾で、何の責任もない人が、長い間、つらさや苦しみを味わってしまう。そんなことはもうくり返してはいけないと改めて思いました。

8月9日には、平和公園で平和祈念式典に参加し、原爆投下時刻の11時2分に、多くの人と一緒に黙とうしました。式典の中で最も印象に残ったのは「献水」です。犠牲者が水を求めて苦しみながら亡くなったということを知りました。長崎市長の平和宣言の中で、「体験は共有できなくても、平和への思いは共有できます」との言葉があり、この式典に参加して感じたことをいろいろな人に伝えたいと思いました。また、国連事務総長を始め、世界中から式典への参加があり、世界の人々は平和を愛し望んでいるのだと思いました。

この旅で学んだことは他にもありました。事前学習で、長崎の原爆が500m上空で炸裂した理由が分からないままになっていましたが、被爆建造物のフィールドワークの中で、これが実験の為だったと聞きました。下に落ちてからだと力が地面に伝わってしまうからです。ミスをしないように確実に全て計算してあったのです。

原爆資料館では、亡くなった人や後遺症で苦しむ人の写真や、焼けた衣服を見たり、熱線でとけたピンを手で触れたりする体験をしました。一度に7万人が亡くなるような強力な兵器の力を目の当たりにして、もう二度と戦争をしてはいけないと思いました。

3日間の旅で、73年前に長崎で起きたことの悲惨さ、苦しみや悲しみが、いまだに続いていることを知り、平和は当たり前ではなく、努力して保たなければいけないものだと思います。

このような機会を設けていただきありがとうございました。お世話になった先生方、区の職員の皆様、一緒に学んだ他校の仲間たちに感謝します。

# 戦争は敵だ

上板橋第二中学校 2年 高橋 せら

1945年（昭和20年）8月9日11時2分、長崎にプルトニウム式原子爆弾「ファットマン」が投下されました。私は、その瞬間の事やその後の被爆者の方々の暮らしを、目で見て、耳で聞き、手で触れ戦争の悲惨さや被爆者の方々の苦しみを学びました。

## ＊青少年ピースフォーラム＊

1日目、ピースフォーラムで被爆者の小峰秀孝さんにお話を伺いその後原爆で被害を受けた建造物などを見学しました。

小峰さんは、当時4歳で、爆心地より約1.5kmの畑で被爆しました。小峰さんは被爆後、被爆によりできた火傷や怪我を理由に、小学校1年生から中学生まで続いた精神的、肉体的ないじめは聞いているだけでも辛くなってくるほどでした。また、中学卒業後、仕事や恋愛は被爆者だからと言って断られたそうです。

私はこの講話を聴いて原爆は被爆した人たちを一生苦しめ続けるものなんだと思いました。

## ➤原爆資料館➤

3日目、原爆資料館を案内して下さった方も被爆者の方で、当時のお話も踏まえ、見学することが出来ました。原爆資料館には、11時2分で止まった時計や、ファットマンのレプリカ、被爆者の方々の写真等がありました。

被爆者の方の傷の写真や、無数のガラスの破片が刺さった服や、穴が開いた服を見たときは、痛かっただろうな、辛かっただろうなと、心が耐え切れないほどでした。

私は、この原爆資料館で心が痛くなり、締め付けられました。見ているだけでも辛いので実際に体験した人は想像がつかないくらい辛くて、怖くて、苦しかっただろうなと思いました。

## ☆これから私たちにできる事☆

私は、今回の平和の旅で、平和が一番大切だということを学びました。私たちにできることは、直接聞いてきた事や見てきたこと、感じたことを、今多くの人に伝える事、大人になっても次の世代に伝える事だと思います。それによって、世界中にまだたくさんある核を使わせてはならないこと、長崎を最後の被爆地にすることができたらよいと思います。

# ナガサキを忘れない、平和を伝える

上板橋第三中学校 2年 鶴田 歩実

今から73年前の8月9日、11時2分。たった一つの原子爆弾によって青く澄んだ空と明るかった人々の笑顔を暗く、奈落の底へと引きずり込んでいきました。一瞬にして破壊された長崎の町には焦げた死体が転がり、なんとか生き残った人々は恐らく一生癒すことのできない深い心の傷を負いました。私は平和の旅に参加し、忘れてはならないあの日を知り、「平和」について深く考えることが出来ました。

## 【被爆体験講話】

この旅に参加して一番印象に残っていることはピースフォーラムでの被爆体験談です。私たちは語り部として活動している小峰秀孝さんに話を聞くことが出来ました。そのなかで「人間は怖い」という言葉が脳裏から離れませんでした。

被爆した人々は体の見た目などの理由からたくさんの人々から差別を受け、精神的な苦痛に耐えられなかったため、自ら命を絶つ人が非常に多かったそうです。そのような中で小峰さんも、学校で差別によるいじめにより「死にたい…」という思いが、頭の中によぎります。そんなことを考える生き方は想像を絶すると感じられました。

小峰さんは私たちに第三の被爆者になってほしくないと言葉一つ一つに重みがありました。

## 【平和祈念式典】

二日目の平和祈念式典では言葉や歌など様々な形で平和を願う人々が日本だけでなく、世界各地から大勢集まりました。なかでも私はこの式典に国連事務総長が参加したことに心揺さぶられました。これは被爆者をはじめとする沢山の人たちが声をあげ、世界に届いたことを意味しています。そして、国連事務総長のアントニオ・グテーレスさんは力強い声でこうおっしゃっていました。

「ノーモアヒロシマ ノーモアナガサキ ノーモアヒバクシャ」

もう二度とこのような悲劇を繰り返してはならないと語っており、私の心に強く響きました。

私はこの旅で原爆の悲惨さ、戦争の愚かさなど、たくさんの事を学ぶことが出来ました。唯一の被爆国だからこそ知ることができ、聞くことができ、とても良い経験になりました。だからこそ、この経験を無駄にすることをせず、周りの人たちに平和について考えてもらい、2度とこのような出来事があってはならないことを発信していきたいと感じました。最後に、このような貴重な経験をさせていただいた長崎のみなさんや、板橋区職員のみなさん、本当にありがとうございました。

# 平和への道のり

桜川中学校 2年 佐藤 美桜

1945年8月9日に長崎に一発の原子爆弾『ファットマン』が落とされました。これにより、約24万人いた人口から、約15万人の死傷者を出しました。

## ～被爆者の方の話～

4歳8か月で爆心地から1.5kmの場所で被爆した小峰秀孝さんは、ひどい火傷を負い一時は医者にも死を宣告されました。しかし、生き残った家族が薬草などを採りなんとか生きることができました。それでも、火傷は治っていないところもあり、足が曲がり、まっすぐに歩けないという症状が残ってしまいました。そのために、いじめられたり、大人になったときに、被爆者であったことから仕事に就くときに大変な思いをしました。このような被爆体験からもう二度とこのようなことを起こさないという意味で、小峰さんにしか話せないことを話しつつづけているそうです。最後に小峰さんは「人間が作ったものは人間が壊せる。そのハンマーになれ。」という言葉をお話してくれました。

## ～平和祈念式典～

今回の平和祈念式典では、初めてアントニオ・グテーレス国連事務総長が長崎を訪れました。その中でグテーレスさんは、このような言葉を残しています。

「ノーモア ヒロシマ ノーモア ナガサキ ノーモア ヒバクシャ」

この言葉は最も心に残った言葉であり、グテーレスさんが世界へ向けて発信した大きな意味をもつ言葉だと思います。この言葉がいろいろな人に広まり、核兵器根絶へと進んでいったらいいと思います。

## ～旅全体を通して～

この旅に参加して、長崎の平和への取り組みや、平和というものがどのようなことなのかを知ることができ、しっかりと伝えていくことが大事だと感じました。また、平和へと進むために自分が何をできるかをしっかりと考えて、それを実行していきたいと思いました。

# 長崎で学んだこと

赤塚第一中学校 2年 田村 茉莉

今から73年前の1945年8月9日午前11時2分、長崎で多くのものがたった一発の原子爆弾によって奪われました。私は「長崎平和の旅」に参加して原爆の威力やその日に起きたこと、さらに平和について学び考えることが出来ました。

## <被爆体験講話>

被爆体験講話では、被爆当時4歳だった小峰秀孝さんの話を聞きました。小峰さんは、爆心地より1.5kmの自宅近くの畑で被爆し、両手、両足、腹をやけどされたそうで、足は3回の手術を受けたそうです。そのため小峰さんはやけどした足が原因でいじめられたり、被爆者だからといって仕事をさせてくれなかったりたくさんつらい思いをして何度も「死にたい」と思ったそうです。でも、母の言葉に救われ死ぬことだけは絶対しないと思ったそうです。生きたくても生きられず、命を落とした人が多くいるのに簡単に「死にたい」なんて思ってしまうといけないということを、実感しました。

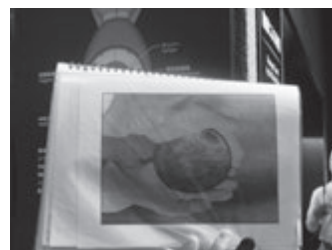
## <平和祈念式典>

平和祈念式典には、たくさんの方が参列していました。その中に外国人の方もたくさん参列していて、日本だけでなく海外の方も平和を願っているのが伝わりました。

11時2分の黙とうでは、もう二度とこのような事は起こってはいけないということを思いながら、1分間平和を願う事が出来ました。

## <原爆資料館>

原爆資料館では原爆にかかわる沢山の資料などを見ることが出来ました。その中でも一番衝撃を受けたのが長崎の原爆に使われたプルトニウムです。重さは6.2kgで、両手で持てるぐらいのものが火薬2万2000トンに相当します。これがたくさんのもを奪ったと思うと本当に胸が痛くなりました。



プルトニウムの写真

今回、長崎平和の旅に参加して沢山の事を学ぶことが出来ました。原爆は、人々の命、生活、すべてを一瞬にして奪います。このようなことはもう2度と起きてはいけません。この3日間で学んだことは自分だけにとどめず、周りの人たちにもしっかりと伝えつづけていきたいと思えます。



# 長崎のバトンを引き継いで

赤塚第二中学校 2年 半瀬 優香

73年前の1945年8月9日午前11時2分、長崎にたった一発の原子爆弾が投下され人々の当たり前の日常が、一瞬にして失われました。しかし、最近は戦争と平和に対する意識が時代と共に希薄になっています。実際に私も「昔そんな事があったのか」という感覚でした。然し、長崎平和の旅に参加して戦争は、「二度と起こしてはいけない。」と強く改めて思い直しました。

## 【被爆体験講話会】

1日目の被爆体験講話会では、当時4歳だった小峰秀孝さんのお話を伺ってきました。小峰さんは、爆心地より1500mの自宅近くの畑で被爆し、両手、両足、腹を火傷し、足は3回も手術を受けたそうです。小峰さんが話してくださったのは、被爆者がどんな人生を送るかということでした。火傷のせいで靴が履けなく雪道を裸足で歩いて学校に通う事もあったそうです。それに被爆者というだけで、いじめられ、差別され、恋愛も出来ない。それでも、頑張って生きてきた小峰さんを私は、本当に尊敬します。73年前は今の生活では考えられないことが、起きていたのだなと思いました。

## 【平和祈念式典】

2日目の平和祈念式典では、大勢の遺族の方が参列していて、国際連合事務総長グテーレス氏や海外の駐日大使らが参加されていました。献水、献花の次、「黙とう」と聞こえ会場の人達が目を閉じて、平和を願う気持ちが1つになったと思いました。

その次の平和宣言で「人間が人間として生きていくためには、地球上に一発たりとも核兵器を残してはいけない」という言葉が1番心にのこりました。1日でも早く核兵器のない平和な世界にするために、戦争の悲惨さを後世に伝えていく努力をしようと思いました。

## 【原爆資料館】

3日目の原爆資料館では、長崎にどんな被害があったかという事を詳しく知りました。特に印象に残ったのは、壁に焼き付けられた人とはしごの影です。爆発時に発生した熱線によるものだそうです。他にも爆風で吹き飛んだ建物や放射線によって人の細胞が破壊され、爆心地から1km以内で被爆した大多数の人が死亡したことが印象的でした。この原因の原子爆弾、コードネーム(ファットマン)の仕組みも分かりました。色々な展示物を見る度に、当時のことを想像して胸が苦しくなりました。

## 【長崎平和の旅を終えて】

この3日間で私の平和への関心が高まりました。平和のバトンをしっかりと次の世代へ伝えていきたいです。

# 『ナガサキ』の思いを『伝える』

赤塚第三中学校 2年 武井 智那

みなさんは原子爆弾が長崎に投下された日時を答えることができますか？

1945年8月9日11時2分。一発の原子爆弾によって長崎の街は一瞬で焼け野原となり、たくさんの尊い命が犠牲になりました。被爆者平均年齢が82歳を超えた今、直接お話を聞かせていただくことが難しくなっており、平和への意識が薄れてきていると思います。

## <原爆資料館>

原爆資料館でとても印象的だった写真があります。



左の写真を見てください。これは原爆が落とされる2日前の写真です。建物がたくさん建っていて栄えています。

次に右の写真を見てください。川のようなものが見えますが、それ以外は何もなくあたり一面焼け野原です。この写真は原爆が投下された1か月後の長崎の写真です。

この2枚の写真は、全く同じ場所で撮影されたものです。この2枚を見ただけでも、原爆の恐ろしさ、悲惨さがわかると思います。私は最初、この写真を見たときにとっても驚き、本当に同じ場所なのかとも思いました。たった一発の原子爆弾で、これほど街が変わり果てるのかと、とても考えさせられる2枚です。

## <長崎平和の旅を終えて>

この3日間は私の中で、とても濃い大事な時間でした。たくさんの写真を見て、中には目を背けたくなるような写真もありましたが、背けてはいけなかったと思います。原爆が投下されたのは今から73年前と、想像するのが難しく、過去のことだと思いかもしれません。でも、ヒロシマやナガサキを過去のことにはしてはいけなかったと思います。今もなお、原子爆弾の放射能による後遺症などで苦しんでいる方々がたくさんいらっしゃいます。その方々の思いを何年後も、何十年後も繋げていくために、今私たちが『ナガサキ』を『伝えて』いかなければなりません。

# 平和の尊さ

高島第一中学校 2年 福田 蒼依

1945年8月9日11時2分「ファットマン」という一発の原爆が投下されました。一瞬にして町は壊れ、7万4000人の方々が亡くなりました。そして、原爆死没者は今年で17万9226人となりました。私の曾祖父もその一人です。

平和に対しての考えが薄れている中、私は一人でも多くの人に平和を伝えるため、被爆地長崎でたくさんの方のことを学んできました。

## 【被爆体験講話】

私たちは当時4歳だった小峰さんからお話を伺いました。小峰さんは火傷で負傷しました。火傷は化膿し、はえがたかったそうです。しかし当時は薬もなく、死の宣告をされたといいますが、家族の愛があったから今でも生きていられるとおっしゃっていました。学校に通うようになると、傷跡で酷いじめを受けたそうです。何度も自殺を考えた、そうおっしゃっていました。就職したくても被爆者はだめと言われ、最終的には隠し通したそうです。原爆はその人の未来までも変えてしまう。本当に憎いと思いました。

## 【原爆資料館】

ここでは、原爆の特徴や放射能の被害、実際の写真などによって当時の悲惨さを目の当たりにしました。鉄が溶けるほどの温度がふりかかるなど想像もつきません。被害を受けた方の写真やガラスの刺さった服などを見ましたが、とても複雑な気持ちでした。同じ人間としてとても辛いものでした。

この旅を通して、私たちが当たり前前に過ごしている毎日は、73年前では当たり前ではありませんでした。被爆を受けても治す薬もない、お腹が空いても食べるものがない、水さえも飲めず亡くなった方もいます。一つ一つを幸せに思い生活しなければなりません。そしてこの先も平和を維持するためにも、私たちの世代が平和を伝えていく必要があります。今の私なら自信を持って平和について伝えられます。それが私たちの義務だと思っています。私たちが明るい未来を作っていきます。



このような貴重な旅をさせて下さった板橋区役所の皆さん、先生方、ありがとうございました。

# 終戦後の終わりなき もうひとつのたたかい

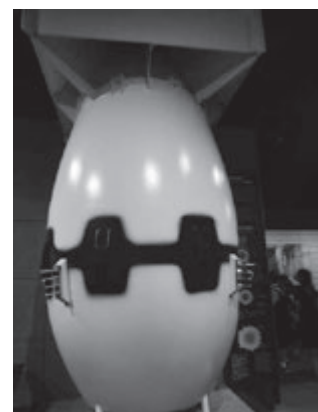
高島第二中学校 2年 小室 友妃花

## ——人間が人間らしく生きることができなくなった瞬間——

戦争の被害者である被爆者が、被爆者であることを隠して生きなければならなかったという事実を知り愕然としました。被爆体験講話で小峰秀孝さんは4歳8カ月の時に被爆し、その後どのように生きてきたかを赤裸々に話してくださいました。就職の時に被爆者であることを伝えると何度も断られたので、被爆者であることを隠して就職したこと。好きな人ができた時に相手に被爆者であることを知られると振られてしまうこと。このような職業選択も制限され結婚も制限されることで、小峰さんの人生は、原爆症の身体的精神的「たたかい」だけではなく社会的差別との「たたかい」でもあったと感じました。

小峰さんに、人生は辛いことばかりだけれど生き抜くためには強い精神力と忍耐力が必要であることを教えてくれたのは、母親でした。被爆者であることを理由にいじめを受けていても小学校を休むことを決して許さなかったそうです。世の中には悪い人もたくさんいるけれども良い人もたくさんいる。死にたいと思うが結局は生き続けている。ここまで生きてこられたのは家族の愛情があったからにはほかならない、とも話してくださいました。

いじめも差別もしている方はすぐに忘れてしまうけれど、受けている方は心の傷となって一生忘れることができないと思います。小峰さんの負った傷の深さを改めて感じました。



長崎型原爆

## ——戦争のない平和な未来に向けて私たちができること——

一発の原子爆弾の投下が、一瞬にして人間らしく生きていた日常生活を奪い去り、死ぬまで苦しみを与え続けています。人間が人間ではなくなります。人間として暮らせなくなります。その苦しみの中、戦後73年間も生活し続けています。これからも苦しみは続きます。一生苦しみから抜け出せません。こんな理不尽なことがあって良いと私はとても思えません。私たちは今、戦争の愚かさ平和の尊さについてもっと話し合うべきだと思います。そして私たちが戦争の悲惨さを伝え平和を守っていかなければならないと強く感じました。戦争は二度と犯してはならないと思います。平和な未来を創り上げるために。



平和祈念像



# 「平和とは何か」を考える

高島第三中学校 2年 佐々木 志穂子

「死にたかった。悔しくてみじめだった。そして、アメリカが憎かった。」

被爆体験講話会で、語り部の小峰さんが発した言葉です。この言葉を聞いたとき、何だか、胸が締め付けられるようでした。

1945年8月9日午前11時2分。長崎に原子爆弾が投下されました。

この爆弾は、「ファットマン」と呼ばれる『プルトニウム 239』を使用した物です。この原爆により約7万4千人の方が亡くなりました。火傷を負った人も沢山いました。

小峰さんも4歳の時に火傷を負い、言葉では言い表しきれない程の痛みに襲われたそうです。火傷の跡がある事や、被爆者だという事を理由にいじめや差別に遭い、大人になって働きたくても雇ってもらえず、自分が被爆者であることを恥ずかしく、悔しい思いをして生きていたと言います。そんな環境の中で、自殺をする被爆者も少なくなかったそうです。たった一発の原爆が、生き残った人々を、肉体的にも、精神的にもずっと苦しめ続けていたと知りました。



では、何故長崎に原爆が投下されたのでしょうか。

根本的な問題は、戦争が起きた事だと思います。様々な国々の自国の利益を第一に考える「利己主義」が、戦争を引き起こし、世界規模に膨れさせ、原爆投下に至ったのだと思います。

『第三の被爆者』を出してはいけません。今後の未来を担う若者が、戦争体験者に積極的に当時の様子を聞く事、また、聞くだけではなく**平和**について考え、実際に行動に移す事が求められると思います。

小峰さんは、

「何事にも打ち勝つ忍耐と辛抱強さをもって、ハンマー（世論）になり壁を破って欲しい。」

と、最後におっしゃっていました。

2017年から18歳選挙権が始まりました。10代の若者たちの声も大きく反映されます。私達は、平和な世界を築く事が出来る代表者をしっかりと見極め、投票をする事が出来ます。これが、小峰さんが言っていた、『ハンマー』の一つだと思います。

私は、平和とは、家族や友人と過ごし、学校に通い、勉強をする何気ない日常だと思います。「お互いを思いやり、感謝をし、尊重し合う。」これは、人々が共存していく中で、一番大切な当たり前のルール、マナーです。

戦争のない平和な世界は、一人一人が築き上げていくものだと思います。平和の旅に参加して知った戦争の事実や、その被害を身近な人から伝えて行き、相手の気持ちを考えた行動を心掛け、自分の周りから笑顔の環（平和）を広げていきたいと思いました。





## 第3部 資料編



広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式  
HIROSHIMA PEACE MEMORIAL CEREMONY

平成30年(2018年)8月6日

August 6, 2018

広島市

The City of Hiroshima

## 式次第

## Program

開 式	8 : 00	<b>Opening</b>
原爆死没者名簿奉納 広島市長 遺族代表	8 : 00	<b>Dedication of the Register of the Names of the Fallen Atomic Bomb Victims</b> Mayor of Hiroshima Representatives of the bereaved families
式 辞 広島市議会議長	8 : 03	<b>Address</b> Chairperson of the Hiroshima City Council
献 花 広島市長 広島市議会議長 遺族代表・こども代表 被爆者代表 来 賓	8 : 08	<b>Dedication of Flowers</b> Mayor of Hiroshima Chairperson of the Hiroshima City Council Representatives of the bereaved families and children Representatives of the atomic bomb survivors Distinguished guests
黙とう・平和の鐘	8 : 15	<b>Silent Prayer and Peace Bell</b>
平和宣言 広島市長	8 : 16	<b>Peace Declaration</b> Mayor of Hiroshima
放 鳩		<b>Release of Doves</b>
平和への誓い こども代表	8 : 24	<b>Commitment to Peace</b> Children's representatives
あいさつ 内閣総理大臣 広島県知事 国際連合事務総長	8 : 29	<b>Addresses</b> Prime Minister of Japan Governor of Hiroshima Secretary General of the United Nations
ひろしま平和の歌（合唱）	8 : 46	<b>Hiroshima Peace Song (chorus)</b>
閉 式	8 : 50	<b>Closing</b>



## 平和宣言

73年前、今日と同じ月曜日の朝。広島には真夏の太陽が照りつけ、いつも通りの一日が始まろうとしていました。皆さん、あなたや大切な家族がそこにいたらと想像しながら聞いてください。8時15分、目もくらむ一瞬の閃光。摂氏100万度を超える火の球からの強烈な放射線と熱線、そして猛烈な爆風。立ち昇ったきのご雲の下で何の罪もない多くの命が奪われ、街は破壊し尽くされました。「熱いよう！痛いよう！」潰れた家つぶの下から母親に助けを求め叫ぶ子どもの声。「水を、水を下さい！」息絶え絶えうめの呻き声うな、唸り声。人が焦げる臭気の中、赤い肉をむき出しにして亡霊のごとくさまよう人々。随所で降った黒い雨。脳裏に焼きついた地獄絵図と放射線障害は、生き延びた被爆者の心身むしばを蝕み続け、今なお苦悩の根源となっています。

世界にいまだ1万4千発を超える核兵器がある中、意図的であれ偶発的であれ、核兵器が炸裂さくれつしたあの日の広島の姿を再現させ、人々を苦難に陥れる可能性が高まっています。

被爆者の訴えは、核兵器の恐ろしさを熟知し、それを手にしたいという誘惑を断ち切るための警鐘です。年々被爆者の数が減少する中、その声に耳を傾けることが一層重要になっています。20歳だった被爆者は「核兵器が使われたなら、生あるもの全て死滅し、美しい地球は廃墟と化すでしょう。世界の指導者は被爆地に集い、その惨状に触れ、核兵器廃絶に向かう道筋だけでもつけてもらいたい。核廃絶ができるような万物の霊長たる人間であってほしい。」と訴え、命を大切に、地球の破局を避けるため、為政者に対し「理性」と洞察力を持って核兵器廃絶に向かうよう求めています。

昨年、核兵器禁止条約の成立に貢献したICANがノーベル平和賞を受賞し、被爆者の思いが世界に広まりつつあります。その一方で、今世界では自国第一主義が台頭し、核兵器の近代化が進められるなど、各国間に東西冷戦期の緊張関係が再現しかねない状況にあります。

同じく20歳だった別の被爆者は訴えます。「あのような惨事が二度と世界に起こらないことを願う。過去の事だとして忘却や風化させてしまうことがあっては絶対にならない。人類の英知を傾けることで地球が平和に満ちた場所となることを切に願う。」人類は歴史を忘れ、あるいは直視することを止めたとき、再び重大な過ちを犯してしまいます。だからこそ私たちは「ヒロシマ」を「継続」して語り伝えなければなりません。核兵器の廃絶に向けた取組が、各国の為政者の「理性」に基づく行動によって「継続」するようにしなければなりません。

核抑止や核の傘という考え方は、核兵器の破壊力を誇示し、相手国に恐怖を与えることによって世界の秩序を維持しようとするものであり、長期にわたる世界の安全を保障するには、極めて不安定で危険極まりないものです。為政者は、このことを心に刻んだ上で、NPT（核不拡散条約）に義務づけられた核軍縮を誠実に履行し、さらに、核兵器禁止条約を核兵器のない世界への一里塚とするための取組を進めていただきたい。

私たち市民社会は、朝鮮半島の緊張緩和が今後も対話によって平和裏に進むことを心から希望しています。為政者が勇気を持って行動するために、市民社会は多様性を尊重しながら互いに信頼関係を醸成し、核兵器の廃絶を人類共通の価値観にしていかなければなりません。世界の7,600を超える都市で構成する平和首長会議は、そのための環境づくりに力を注ぎます。

日本政府には、核兵器禁止条約の発効に向けた流れの中で、日本国憲法が掲げる崇高な平和主義を体現するためにも、国際社会が核兵器のない世界の実現に向けた対話と協調を進めるよう、その役割を果たしていただきたい。また、平均年齢が82歳を超えた被爆者をはじめ、放射線の影響により心身に苦しみを抱える多くの人々の苦悩に寄り添い、その支援策を充実するとともに、「黒い雨降雨地域」を拡大するよう強く求めます。

本日、私たちは思いを新たに、原爆犠牲者の御霊に衷心より哀悼の誠を捧げ、被爆地長崎、そして世界の人々と共に、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けて力を尽くすことを誓います。

平成30年（2018年）8月6日

広島市長 松 井 一 實

## 平和への誓い

人間は、美しいものをつくることができます。  
人々を助け、笑顔にすることができます。  
しかし、恐ろしいものをつくってしまうのも人間です。

昭和20年（1945年）8月6日 午前8時15分。  
原子爆弾の投下によって、街は焼け、たくさんの命が奪われました。  
「助けて。」と、泣き叫びながら倒れている子ども。  
「うちの息子はどこ。」と、捜し続けるお父さんやお母さん。  
「骨をもいでください。」と頼む人は、皮膚が垂れ下がり、腕の肉が無い姿でした。  
広島は、赤と黒だけの世界になったのです。

73年が経ち、私たちに残されたのは、  
血がべっとりついた少女のワンピース、焼けた壁に記された伝言。  
そして今もなお、遺骨の無いお墓の前で静かに手を合わせる人。  
広島に残る遺品に思いを寄せ、今でも苦しみ続ける人々の話に耳を傾け、  
今、私たちは、強く平和を願います。

平和とは、自然に笑顔になれること。  
平和とは、人も自分も幸せであること。  
平和とは、夢や希望をもてる未来があること。

苦しみや憎しみを乗り越え、平和な未来をつくろうと懸命に生きてきた広島の人々。  
その平和への思いをつないでいく私たち。  
平和をつくることは、難しいことではありません。  
私たちは無力ではないのです。  
平和への思いを折り鶴に込めて、世界の人々へ届けます。  
73年前の事実を、被爆者の思いを、  
私たちが学んで心に感じたことを、伝える伝承者になります。

平成30年（2018年）8月6日

こども代表

広島市立牛田小学校 6年

しんかい みおり  
新開 美織  
よねひろ ゆうひ  
米廣 優陽

広島市立五日市東小学校 6年

## Commitment to Peace

August 6, 2018

People can make beautiful things.  
People can help and make each other smile.  
But people also make terrifying things.

1945, August 6, 8:15 am.  
With the dropping of the atomic bomb, the city burned, and many lives were taken.  
“Help!” the fallen children wail.  
“Where’s my son?” ask searching mothers and fathers.  
“Please take my bones, too,” begs a woman with dangling skin but no flesh on her arm.  
Hiroshima had become a world of red and black.

After 73 years, left to us are  
a girl’s blood-soaked dress and a burnt wall of scrawled messages.  
And people even now praying quietly at empty graves.  
Thinking of things the dead left in Hiroshima, we listen to some still in pain.  
We want peace now, so badly.

Peace is being able to smile naturally.  
Peace is everyone and yourself being happy.  
Peace is a future with hopes and dreams.

Rising above suffering and hate, Hiroshima’s people worked hard to build a peaceful future.  
We are the ones taking up that desire for peace.  
Building peace is no difficult task.  
We are not without power;  
We fold our desire into paper cranes and give them to the world.  
Learning what happened 73 years ago and how the *hibakusha* feel,  
what we learn and feel in our hearts we’ll pass on.

Children’s Representatives:

Miori Shinkai (6<sup>th</sup> grade, Hiroshima City Ushita Elementary School)

Yuhi Yonehiro (6<sup>th</sup> grade, Hiroshima City Itsukaichi-higashi Elementary School)







# 長崎平和宣言

73年前の今日、8月9日午前11時2分。真夏の空にさく裂した一発の原子爆弾により、長崎の街は無残な姿に変わり果てました。人も動物も草も木も、生きとし生けるものすべてが焼き尽くされ、廃墟と化した街にはおびただしい数の死体が散乱し、川には水を求めて力尽きたたくさんの死体が浮き沈みしながら河口にまで達しました。15万人が死傷し、なんとか生き延びた人々も心と体に深い傷を負い、今も放射線の後障害に苦しんでいます。

原爆は、人間が人間らしく生きる尊厳を容赦なく奪い去る残酷な兵器なのです。

1946年、創設されたばかりの国際連合は、核兵器など大量破壊兵器の廃絶を国連総会決議第1号としました。同じ年に公布された日本国憲法は、平和主義を揺るぎない柱の一つに据えました。広島・長崎が体験した原爆の惨禍とそれをもたらした戦争を、二度と繰り返さないという強い決意を示し、その実現を未来に託したのです。

昨年、この決意を実現しようと訴え続けた国々と被爆者をはじめとする多くの人々の努力が実り、国連で核兵器禁止条約が採択されました。そして、条約の採択に大きな貢献をした核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）がノーベル平和賞を受賞しました。この二つの出来事は、地球上の多くの人々が、核兵器のない世界の実現を求め続けている証です。

しかし、第二次世界大戦終結から73年たった今も、世界には14,450発の核弾頭が存在しています。しかも、核兵器は必要だと平然と主張し、核兵器を使って軍事力を強化しようとする動きが再び強まっていることに、被爆地は強い懸念を持っています。

核兵器を持つ国々と核の傘に依存している国々のリーダーに訴えます。国連総会決議第1号で核兵器の廃絶を目標とした決意を忘れないでください。そして50年前に核不拡散条約（NPT）で交わした「核軍縮に誠実に取り組む」という世界との約束を果たしてください。人類がもう一度被爆者を生む過ちを犯してしまう前に、核兵器に頼らない安全保障政策に転換することを強く求めます。

そして世界の皆さん、核兵器禁止条約が一日も早く発効するよう、自分の国の政府と国会に条約の署名と批准を求めてください。

日本政府は、核兵器禁止条約に署名しない立場をとっています。それに対して今、300を超える地方議会が条約の署名と批准を求める声を上げています。日本政府には、唯一の戦争被爆国として、核兵器禁止条約に賛同し、世界を非核化に導く道義的責任を果たすことを求めます。

今、朝鮮半島では非核化と平和に向けた新しい動きが生まれつつあります。南北首脳による「板門店宣言」や初めての米朝首脳会談を起点として、粘り強い外交によって、後戻りすることのない非核化が実現することを、被爆地は大きな期待を持って見守っています。日本政府には、この絶好の機会を生かし、日本と朝鮮半島全体を非核化する「北東アジア非核兵器地帯」の実現に向けた努力を求めます。

長崎の核兵器廃絶運動を長年牽引してきた二人の被爆者が、昨年、相次いで亡くなりました。その一人の土山秀夫さんは、核兵器に頼ろうとする国々のリーダーに対し、こう述べています。「あなた方が核兵器を所有し、またこれから保有しようとするのは、何の自慢にもならない。それどころか恥ずべき人道に対する犯罪の加担者となりかねないことを知るべきである」。もう一人の被爆者、谷口稜暉さんはこう述べました。「核兵器と人類は共存できないのです。こんな苦しみは、もう私たちだけでたくさんです。人間が人間として生きていくためには、地球上に一発たりとも核兵器を残してはなりません」。

二人は、戦争や被爆の体験がない人たちが道を間違えてしまうことを強く心配していました。二人がいなくなった今、改めて「戦争をしない」という日本国憲法に込められた思いを次世代に引き継がなければならないと思います。

平和な世界の実現に向けて、私たち一人ひとりに出来ることはたくさんあります。

被爆地を訪れ、核兵器の怖さと歴史を知ることはその一つです。自分のまちの戦争体験を聴くことも大切なことです。体験は共有できなくても、平和への思いは共有できます。

長崎で生まれた核兵器廃絶一万人署名活動は、高校生たちの発案で始まりました。若い世代の発想と行動力は新しい活動を生み出す力を持っています。

折り鶴を折って被爆地に送り続けている人もいます。文化や風習の異なる国の人たちと交流することで、相互理解を深めることも平和につながります。自分の好きな音楽やスポーツを通して平和への思いを表現することもできます。市民社会こそ平和を生む基盤です。「戦争の文化」ではなく「平和の文化」を、市民社会の力で世界中に広げていきましょう。

東日本大震災の原発事故から7年が経過した今も、放射線の影響は福島の方々を苦しめ続けています。長崎は、復興に向け努力されている福島の方々を引き続き応援していきます。

被爆者の平均年齢は82歳を超えました。日本政府には、今なお原爆の後障害に苦しむ被爆者のさらなる援護の充実とともに、今も被爆者と認定されていない「被爆体験者」の一日も早い救済を求めます。

原子爆弾で亡くなられた方々に心から追悼の意を捧げ、私たち長崎市民は、核兵器のない世界と恒久平和の実現のため、世界の皆さんとともに力を尽くし続けることをここに宣言します。

2018年（平成30年）8月9日

長崎市長 **田 上 富 久**

## 平和への誓い

1945年8月9日、13歳だった私は、爆心地から3.2キロ離れた自宅の2階で被爆しました。爆風で飛んできた大きなガラス戸の下敷きになりましたが、奇跡的に無傷で助かりました。

3日後の今ごろ、私は、家屋が跡形もなく消滅し、黒焦げの死体が散乱するこの丘の上を歩き回っていました。探し当てた父方の伯母の家屋跡には、黒焦げになった伯母たち家族の遺体が転がっていました。この時、丘の下の上野町では、3日間生きながらえた母方の伯母の遺体をトタン板に載せて焼いていました。焼き終えた人の形をとどめた遺骨を見たとき、優しかった伯母の姿が目に見え、その場に泣き崩れました。原爆により身内5人の命が一挙に奪われました。この日一日、私が目撃した浦上地帯の地獄の惨状を私の脳裏から消し去ることはできません。

原爆は全く無差別に、短時日に、大量の人々の命を奪い、傷つけました。そして、生き延びた被爆者を死ぬまで苦しめ続けます。人間が人間に加える行為として絶対に許されない行為です。

全国に移り住んだ被爆者たちは、被爆後10年余り、誰からも顧みられることなく、原爆による病や死の恐怖、偏見と差別などに一人で耐え苦しみました。

ビキニ環礁での、1954年3月1日のアメリカの水爆実験による「死の灰」の被害に端を発し、全国に広がった原水爆禁止運動に励まされて、1956年8月、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）が結成されました。

日本被団協に結集した被爆者は、「同じ苦しみを世界の誰にも味わわせてはならない」と原爆被害の残虐な真相を、国の内外に伝え、広げ、核兵器の速やかな廃絶を世界に訴え続けてきました。

2010年代に入り、国際政治の場において、核兵器の非人道的な被害に焦点が当てられるようになるなか、長年にわたる被爆者と原水爆禁止を願う市民社会のさまざまな活動、さらにICANの集中的なロビー活動などが実を結び、2017年7月、「核兵器禁止条約」が国連で採択されました。被爆者が目の黒いうちに見届けたいと願った核兵器廃絶への道筋が見えてきました。これほど嬉しいことはありません。

ところが、被爆者の苦しみと核兵器の非人道性を最もよく知っているはずの日本政府は、同盟国アメリカの意に従って「核兵器禁止条約」に署名も批准もしないと、昨年原爆の日総理自ら公言されました。極めて残念でなりません。

核兵器国とその同盟国は、信頼関係が醸成されない国が存在する限り、核抑止力が必要であると弁明します。核抑止力は核兵器を使用することが前提です。国家間の信頼関係は徹底した話し合いで築くべきです。

紛争解決のための戦力は持たないと定めた日本国憲法第9条の精神は、核時代の世界に呼びかける誇るべき規範です。

私は、多くの先人たちの働きを偲びつつ、速やかに「核兵器禁止条約」を発効させ、核兵器もない戦争もない世界の実現に力を尽くすことを心に刻み、私の平和への誓いといたします。

2018年（平成30年）8月9日

被爆者代表 **田中 熙巳**